

令和元年度

文部科学省委託事業

# 高等学校における次世代の学習ニーズを 踏まえた指導の充実事業

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

〈 2 年 次 〉

報 告 書

令和2年3月

京都市立西京高等学校 定時制



## はじめに

近年の定時制高校は、不登校経験のある生徒や様々な「困り」から個別の支援を要する生徒などが多く入学しています。そのような生徒に社会の一員として生きていく力をつけるためには、多様な学習ニーズに応えていく必要があります。本校では平成28年度から2年間、「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の一環として、スクールカウンセラー（以下SC）・スクールソーシャルワーカー（以下SSW）と協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りという研究の中で、様々な「困り」を抱えた生徒に対する支援方法の確立および校内体制の構築に取り組んでまいりました。その取組を通して、教職員の支援に対する意識の深化はもとより、SC・SSWとの協働や外部機関との連携、SCの相談件数の増加やSSWと京都市の児童相談所をはじめとする外部機関との情報交流の機会の増加など様々な成果を得ました。

平成30年度からは「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」として、個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立はもとより、より具体的なテーマを設定して研究を進めてまいりました。入学生の内、不登校経験のある生徒はここ数年60～70%で推移しており、発達障がい等の診断や、疑いのある生徒、様々な家庭環境から児童相談所の見守り対象になっている生徒など、生徒の「困り」は多岐にわたっています。また、生徒アンケートにおいてもおよそ7割の生徒が読み書きや感情のコントロール等、何らかの「困り」を感じています。

そのような「困り」を抱えた生徒たちの学習ニーズに対応するため、様々な研修会や学習指導の実践事例の積み上げや交流、また先進校に学ぶ取組などを行ってきました。教職員の負担感がないわけではありませんが、生徒の成長が教職員の達成感につながっていくものと考えております。また、京都市では、様々な「困り」を抱えながらも「学習支援」や「学び直し」を求めている生徒を対象に、令和3年度に「京都奏和高等学校」を定時制単独校として開校いたします。本校での様々な取組が「京都奏和高等学校」に受け継がれ、生かされることを確信しています。

ここに本年度の取組を報告書としてまとめました。本研究はまだまだ発展途上のものと考えておりますので、今後、さらに研究の精度を高めるためにも皆様の忌憚のないご意見、ご指導をお願いいたします。

京都市立西京高等学校定時制 副校長 中塚 洋

# 目 次

はじめに

I	学校の概要	3
1.	学校の基本情報	3
2.	学校の特色	6
3.	学校の現状と課題	6
II	調査研究の概要	8
1.	調査研究課題名	8
2.	調査研究のねらい	8
3.	調査研究の内容	8
4.	調査研究の校内組織	10
III	調査研究の報告	11
1.	調査研究の目的および目標	11
2.	調査研究の内容および成果と課題	12
3.	調査研究の到達点	46
IV	来年度の課題	49
資料1	学習状況のチェック表	51
資料2	授業のチェックシート	52
資料3	自己目標マップ	53
資料4	意識調査アンケート結果	54

# I 学校の概要

## 1. 学校の基本情報

京都市立西京高等学校 定時制課程 設置学科：普通科

住所：京都市中京区西ノ京東中合町1

※ 全日制課程との併置校

### (1) 沿革

昭和10年10月	専修商業学校	(高小卒, 4年制)
昭和13年4月	夜間商業学校	( // )
昭和16年4月	京都市立第一商業学校第二本科	( // )
昭和23年4月1日	京都市立御池商業高等学校	(新制中学卒, 4年制)
昭和23年10月31日	京都市立西京高等学校定時制課程	( // )
昭和38年4月1日	京都市立西京商業高等学校定時制課程	( // )
平成15年4月1日	京都市立西京高等学校定時制課程	(3年制, 4年制)

### (2) 教職員数

職名	校長	副校長	事務長	教諭	常勤講師	養護教諭	非常勤講師	実習助手	専門主事	事務職員	S C	S W	S C	総合育成支援員	A L T	管理 用 務 員	夜間 警 備 用 務 員	警備 用 務 員	校 医	歯 科 医	耳鼻 咽 喉 科 医	眼 科 医	薬 劑 師
人数	1	1	1	23	3	1	6	1	1	6	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1

※ 専門主事：総合育成支援教育に関するアドバイザーとして勤務

SC：スクールカウンセラー，SSW：スクールソーシャルワーカー

SCC：スクールキャリアコンサルタント，ALT：アシスタントランゲージティーチャー

### (3) 在籍生徒数（令和元年5月1日現在）

	1組			2組			3組			合計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1年	9	9	18	11	7	18	9	8	17	29	24	53
2年	6	9	15	7	8	15	7	7	14	20	24	44
3年	8	3	11	7	3	10	9	6	15	24	12	36
合計										73	60	133

(4) 教育課程表 (平成31年度入学生用)

A コース

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2
2		現代文 B 2	〔日本史 B 地理 B〕 3	地学基礎 2
3	現代社会 3			世界史 B 3
4		数学 I 3	数学 A 3	
5	生物基礎 2			化学基礎 2
6		体育 3	体育 2	
7	地学基礎 2			コミュニケーション 英語 II 3
8		保健 1	家庭総合 2	
9	〔美術道 I 書道 I〕 2			コミュニケーション 英語 I 3
10		コミュニケーション 英語基礎 3	家庭総合 2	
11	社会と情報 3			〔古典 A CALL演習 2 ビジネス経済〕 2
12		総合基礎 1	〔美術道 II 情報処理〕 2	
13	◎生活基礎 1			総合進路 1
14	特別活動	◎生活活用 1	◎生活応用 1	
15		特別活動	特別活動	

◎ は、自立活動を目的とした科目で、必要に応じて履修することができる。

網掛け は、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

※ Aコース：普通科目の充実を図り、選択科目を多く配置することにより、発展的な興味や将来の進路の実現を積極的に支援するコース。

## B コース

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2
2		現代文 B 2	〔日本史 A 2 地理 A 2〕	世界史 A 2
3	現代社会 3			世界史 A 2
4		数学 I 3	数 学 A 3	
5	生物基礎 2			体 育 2
6		体 育 3	保 健 1	
7	保 健 1			コミュニケーション 3 英 語 I 3
8		〔美術道 I 2 書道 I 2〕	家 庭 総 合 2	
9	コミュニケーション 3 英語基礎 3			簿 記 3
10		社会と情報 3	情報処理 2	
11	総合基礎 1			〔地学基礎 2 CALL演習 2 ビジネス経済〕
12		◎生活基礎 1	総合進路 1	
13	特別活動	◎生活活用 1	◎生活応用 1	特別活動
14		特別活動	特別活動	

◎ は、自立活動を目的とした科目で、必要に応じて履修することができる。

網掛け は、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

※ Bコース：普通科目の学習のほかに、情報処理や簿記などの商業科目を重点的に学習し、資格取得も可能にするなど実社会に即応できる力を養うと共に個性や向上心の伸長を積極的に支援するコース。

## 2. 学校の特徴

西京高校は京都市西部に位置し、京都市営地下鉄西大路御池駅前に立地する。交通の便が良いことから、地下鉄沿線である醍醐・山科方面、阪急京都線沿線である向日市・長岡京市方面、JR嵯峨野線沿線の亀岡市・南丹市方面など、京都市中心部以外にも広い地域から生徒が通っている。

市内定時制高校で唯一、長期欠席者を対象とした選抜試験を実施している。また、単位制に移行する定時制高校が多い中、学年制による教育課程を展開している。

### (1) 3年間で卒業できる教育課程

本校は、4年で卒業できる教育課程も設定しているが、本年度在籍する生徒は全員が3年間の卒業を目指している。「午後から始まる高校」として始業時間を少し早め、1日の授業時間は午後4時20分からの5時限を基本とし、2年生からはさらに早い午後3時30分から6時限授業を行う日もある。

### (2) 少人数によるクラス・講座編成

1クラスの人数や授業講座の人数を20名以下の少人数で編成している。教員にとっては生徒一人一人にきめ細かい指導ができ、生徒にとっては疑問点や不明点について気軽に質問ができるアットホームな雰囲気です。数学や英語などの授業の一部および情報関連の授業ではチームティーチングを実施している。

### (3) 定時制専用教室

定時制課程は全日制課程とは別に単独のエリアを有しており、ホームルーム教室をはじめ単独で使用できる教室を有している。そのため、「自分の机・自分の教室」があり、いつでも自由に学習に取り組むことができる。学習が苦手な生徒に対しての補習、進路目標に向けての補習や生徒の自主学習に積極的に活用している。

### (4) 2年生からのコース選択

本校はコース制を採用しており、2年生からAコースまたはBコースを選択する。進学から就職まで生徒の進路希望や興味関心に応じて幅広く学習をすることができる。特にBコースでは簿記や情報関係の資格取得にも取り組んでいる。

## 3. 学校の現状と課題

### (1) 近年の定時制高校に期待される役割の変化

定時制高校は、従来の勤労青少年に対する学習の場としての役割だけでなく、不登校経験のある生徒や特別な支援を要する生徒の増加に伴い、多様な学びの動機や学習歴を有す



る生徒の学習保障の場として重要な役割を担うなど、その役割が大きく変化している。

## (2) 京都市立高校における、定時制課程在籍生徒の状況

中学校在学時の不登校経験者の割合は65%～70%に達する。また、発達障がいや発達遅滞の診断を受けている生徒およびその疑いがあると思われる生徒の割合は25%近くを占め、その他様々な環境等に伴う「困り」を抱える生徒が増加している。

中途退学率、原級留置率はいずれも10%程度で推移しており、多様化する生徒たちのニーズにきめ細かく対応することが急務となっている。

## (3) 西京高校定時制の現状

募集定員の5分の1程度を中学時に年間30日以上欠席がある生徒を対象とした「長期欠席者特別入学者選抜」で合格させており、一般の選抜合格者も含めて在校生に占める不登校経験生徒の割合は60%近くに上る。在校生のうち、生活保護家庭、児童相談所の見守り、発達障がいの診断や疑い、ひとり親家庭など、「困り」を抱えた生徒が約80%に上るのが現状である。

生徒の「困り」を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の調査研究において、スクールカウンセラー（以下、「SC」という。）およびスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」という。）と協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りに関して調査研究に取り組んできた。2年間の研究で一定の校内体制の形は見えてきてはいるが、より実効を伴う支援を行っていくためには、さらなる研究が必要である。特に、校内体制が整い適切な時期に適切な支援を行うことで環境や特性に関する「困り」が解消に向かっても、学力不振から脱却できずに中途退学や原級留置となる生徒が無くなるわけではない。そうした生徒が進級・卒業していくためには、個々の状況に応じた学習指導が必要となり、あわせて学習目標の達成度合いを評価する評価法の改善または新規の作成が必要となる。

## (4) 西京高校定時制が抱えている主な課題

発達障がいがある生徒について、特性を踏まえた学習指導が組織立って構築できていない。また、小学校・中学校で不登校があった場合の未学習内容についての学習指導についても教員個々の対応となっており組織的な方策が作れていない。

外国人生徒の数は少ないが、ごく短期間の中学校在学（日本滞在）を経て入学してくるケースが生じており、日本語能力の問題など、その学習指導に苦慮している。

## Ⅱ 調査研究の概要

### 1. 調査研究課題名

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

### 2. 調査研究のねらい

不登校経験生徒、発達障がい等の診断を受けている生徒や診断は受けていないが疑いのある生徒、生活保護の対象家庭の生徒や児童相談所の見守り対象になっている生徒などの、特性や環境に関する何らかの「困り」を抱えた生徒の中には、学力不振を理由として中途退学や転学、原級留置となる生徒が少なくない。また、日本語によるコミュニケーション力が十分身につかないまま入学してくる外国人生徒に対して、日本語運用能力の向上と並行して高等学校の学習内容に対応させる必要があるケースも生じている。

「困り」のあるこれらの生徒を、多様な学習ニーズを持つ生徒と位置づけて焦点化し、確かな学力を身につけて社会で生きていく力をつけるための学習指導法の開発を目標として調査研究に取り組んだ。

研究調査2年目になる本年度も、次の2つをねらいとして設定し、学習態勢確立のための支援方法および支援体制を策定したのち、その体制のもとで学習指導法ならびに評価方法を確立していくための調査研究を行うこととした。

#### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

SCやSSWと協働しながら支援する校内体制の充実に伴って、生徒の「困り」に対するアセスメントと対処の精度を高めて「困り」を解消する支援方法を確立することで、学習態勢を整える。

#### (2) 学習指導方法と評価方法の確立とその実施のための校内体制構築

学習障がいがある生徒や不登校経験のある生徒など、多様な学習ニーズに即した学習指導法と評価方法の確立およびその実施のための校内体制を構築する。

### 3. 調査研究の内容

生徒の「困り」を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の委託を受けて2年間行ってきた調査研究を、「生徒の学習態勢確立のためにSCやSSWと協働しながら支援する校内体制の構築」として拡張した上で、その成果を

踏まえて多様な学習ニーズに応じた学習指導法を確立するために、以下の項目について本年度も引き続き調査研究を行う。

### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の策定

- (a) SCおよびSSWとの協働体制のもとで、生徒情報の機能的な収集・管理・共有・活用と効率的なケース会議の開催を通して、生徒のアセスメント機能を強化し、学習態勢確立に向けた支援等につなげる。
- (b) ソーシャルスキルトレーニング（以下、「SST」という）の具体的な実施方法について確立する。

### (2) 学習指導方法と評価方法の確立とその実施のための校内体制構築

- (c) 発達障がい要因とする学力不振への対処法や、そのような生徒の学習指導法及び評価方法について確立する。
- (d) 不登校を経験した生徒の未学習への対処法や、そのような生徒の学習指導法及び評価方法について確立する。
- (e) 日本語運用能力が不足している外国人生徒に対して(c)(d)の指導法及び評価方法を応用することを研究する。

### (3) 教職員の知識・理解の深化

- (f) 平成28年度から2年間の調査研究にともなって培われた教職員の知識をより深化させながら、新たな課題についての基礎的知識等を養う場として教職員の研修を実施するとともに、先進校の視察等による事例研究を行う。

### (4) 校内体制を確立するための人材育成

- (g) 校内体制を確立するために次のような人材の育成が必要と考える。
  - ・ 発達障がいがある生徒や不登校を経験した生徒、外国人生徒の学習指導を校内で円滑に行うため、主導的立場で取りまとめる人材。
  - ・ SCおよびSSWを校内の一員として協働する意識と支援に対する知識や考え方を持った教職員。
  - ・ 教職員と共に「困り」の解消に取り組めるSCやSSW。
  - ・ 「ケース会議」を円滑に進行させるために教職員とSCおよびSSWの信頼関係を構築し、SCやSSWを校内で有効に機能させる「支援コーディネーター」。

※「支援コーディネーター」とは、特別支援教育コーディネーター（京都市での呼称は総合育成支援教育主任）の役割を担う担当者の校内での呼称。本研究においては、その本来定義にとどまらず校内での生徒支援を主導する役割と位置付け、昨年度までの研究成果として「支援コーディネーター」と呼称することとして以下のように定義した。

- 特別支援教育コーディネーターとしての本来の役割にとらわれずに、生徒に対して直接支援を行う教職員（担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌や教職員（SC・SSWという専門職を含む）

と協働しながら多面的に支え，調整する者として位置付ける。

- 主たる役割として「ケース会議等支援に係わる会議の招集と主催および進行」「SC・SSW，総合育成支援員等非常勤職員との情報交流と共有および勤務日程の調整」を担う。
- 教育支援部の一員としての役割「生徒情報の収集・整理」「関係教職員間での情報共有」も担う。

## 4. 調査研究の校内組織

### 研究指定実行委員会（校内呼称）

氏名	職名	校務分掌・担当教科等
中塚 洋	定時制副校長	
澁谷 賢一	教諭	教務部 教務主任 理科
八木 幸一郎	教諭	生徒部 生徒指導主事 国語科
高坂 林	教諭	進路部 進路指導主事 英語科
椿 浩子	教諭	保健給食部 保健主事 英語科
小野 潔	教諭	教育支援部 部長 数学科
山根 明子	養護教諭	保健給食部
中山 千恵美	教諭	教育支援部 国語科
小島 直起	教諭	2年担任 理科
八木 洋子	教諭	教育支援部 家庭科
十河 博子	スクールカウンセラー	
三木 泉	スクールソーシャルワーカー	

### Ⅲ 調査研究の報告

#### 1. 調査研究の目的および目標

本校では、在校する生徒たちの80%前後が「生活保護等の経済的課題」や「児童相談所の見守り対象」などといった家庭環境の「困り」を抱えており、学校内での支援だけではなく外部機関との連携が必要な状況である。

そのような状況の中でも生徒たちの学習を支援して確かな将来に繋げるため、平成28～29年度の2年間にわたって文部科学省委託事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に取り組み、平成30年度からは本研究に取り組み、支援の事例を積み重ねてきた。

入学時に中学校からの聞き取りや保護者面談等で得た生徒情報の「効果的な収集」と「適切な共有」を基盤とし、ケース会議等においてSCおよびSSW等の専門職との「情報の共有および有効活用」をしつつ協働することを通して、個々の生徒への対処的支援策だけではなく予防的な支援対策を実施してきた。その取組の成果は徐々にではあるが上がりつつあり、また取組を通して多くの教職員の意識改善にも繋がってきたところである。

しかし、適切な支援を行うことで環境や特性に関する「困り」が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒が存在する。そうした生徒には、個々の状況に応じた学習指導とあわせて評価法の改善または新規の作成が必要となると考えるが、現状は各教員の経験に頼った対応にとどまっており、より組織的かつ持続可能な方策の策定が求められるところである。

##### (1) 目的

本調査研究においては上記の「適切な支援を行うことで環境や特性に関する『困り』が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒」の解消を目指して、組織的かつ持続可能な「学習指導法」と「評価法」の改善または新規の作成を目的とした。

##### (2) 目標

目標としては、次の3点を設定した。

###### 目標1 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

個々の生徒が学習に臨む態勢を整えることができるように、そのニーズに応じて教員が適切に支援できる校内システムの構築に取り組み、教職員とSCやSSW等の専門職とが一体となって、それぞれの専門性を活かした効果的かつ効率的な連携のあり方を策定し実践してきた。

本年度はその実践を通して得られた支援のあり方を、より良い形へ改善していくことを試みた。

## 目標2 学習指導方法と評価方法の確立

生徒個々のニーズに応える学習指導法の開発にあたり、「発達障がいがある生徒を対象とした特性を踏まえた学習指導法」「小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった生徒を対象とした未学習内容を補充しながらの学習指導法」について事例を蓄積し分析する。また、本年度は「日本語以外を母国語とする生徒を対象とした学習指導法」についても分析する。

学習目標の達成度合いを評価する評価法については、個々に応じた学習指導法に適切しながら他の生徒の評価との整合性を持たせた評価法を策定する。

## 目標3 支援を支える教職員の知識の深化

研修を通して教職員の知識・認識の深化と意識の変革を目指し、校内での研修会を実施した。生徒たちの多様なニーズに対し柔軟に対応していくための情報を得る機会とした。併せて専門家との有機的な協働のための情報共有の場ともした。また、教職員の知識・認識の深化を目指して先進校の視察を行い、得られた知識を校内で報告して共有を図った。

## 2. 調査研究の内容および成果と課題

### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

平成28～29年度の2年間にわたって取り組んだ文部科学省委託事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」から平成30年度の本研究1年目の取組を通して、支援の事例を積み重ねてきた。また、支援体制についても改善を重ねてきたが残された課題も多く、その改善に取り組んできた。

#### (a) 「支援コーディネーター」

##### ◇ 取組内容

「支援コーディネーター」が特別な力量のある教員にしか務まらないということでは、担当者の固定化、あるいは人事異動等による人材の枯渇等が危惧される。したがって、その活動内容の文章化を一定行い、「支援コーディネーター」を担うことになった者の指針とすることとした。

##### ◆ 本年度の成果

- ① 生徒に対して直接支援を行う教職員（担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌や教職員（SC・SSWという専門職を含む）と協働しながら多面的に支え、調整する者として位置付ける。
- ② 主たる役割
  - ▶ 生徒情報の収集・整理
  - ▶ 関係教職員（SC・SSW、総合育成支援員等非常勤職員を含む）間での情報共有

- ▶ ケース会議等の生徒支援に係わる会議の招集と主催および進行
- ▶ 生徒への支援策（プラン）の評価と次の支援策の原案作成
- ▶ SC・SSW，総合育成支援員等非常勤職員の勤務日程調整

③ 総合育成支援教育主任としての職務についても遂行する。

## ■ 来年度への課題と改善への展望

来年度，この内容に基づいて実施しながら問題点の検証を行う。

(b) 校内の支援にかかわる会議等の在り方

### ◇ 取組内容

毎年改善を加えている校内の支援にかかわる連携や会議の在り方について，さらなる改良案を検討した。支援に関わる教職員（非常勤職員のSC・SSWを含む）の会議を週に1回開催しているが，時間的制約と構成員が多くなり過ぎないようにという理由から，現在はHR担任の参加を必要に応じてとしている。しかし，より良い情報の集約と迅速な支援のためその参加を必須とすることを中心に，分掌ごとの会議を充実させながら情報集約が進むような形態を目標として改良を目指した。

### ◆ 本年度の成果

① 支援委員会の構成員は来年度より以下の通りとする。

副校長

支援コーディネーター

各学年代表の担任

生徒部代表〔生徒指導主事〕

保健給食部代表〔保健主事，養護教諭〕

SC

SSW

必要に応じて（事案に応じて）以下についても会議に参加することとする。

進路指導部代表〔進路指導主事，スクールキャリアコンサルタント（以下，「SCC」という。）〕

教育支援部部員

- ② 支援委員会を構成する分掌（各担任団および各部署）代表は，事前に分掌内で共有・検討された内容を持ち寄る。
- ③ 支援委員会は各事案についてケース会議等の生徒支援に係わる会議の開催につなげる。ただし，ケース会議等は「支援コーディネーター」の判断で臨機応変に開催できるものとし，支援委員会の要請を必須とはしない。
- ④ ケース会議：支援対象とする生徒の情報整理と現状についてのアセスメントを行い，対応策と役割分担のプランニングを行う。意思決定の場。

開催は、

- ▶ 支援委員会からの要請に基づく場合（緊急を要さない場合）
  - ▶ 「支援コーディネーター」の判断に基づく場合（緊急対応が必要な場合）
- に大別する。

## ■ 来年度への課題と改善への展望

これまで支援委員会の構成員に各学年の代表がいなかったことで、気になる生徒の情報が上がってきても学校としての（または担任の）対応が遅れてしまうことがあった。この反省から、来年度は支援委員会の構成員に各学年団の代表を入れることにより、円滑な情報共有と迅速な支援実行が行えるか否かの検証を行う。

### (c) 生徒情報の収集・管理・共有・活用

#### ◇ 取組内容

過去の研究の成果として情報を集めて、適切な管理のもと活用する体制は整ってきた。その上で、日々、教員が気付いたことを手軽に記録するシステムを策定した。

具体的には、京都市立高等学校で共通して使用している生徒の成績・出欠等種々の情報を記録・集約するPC上のシステム（呼称：校務支援システム）に、教科担当者が毎時間の授業の出欠を記録する際に気付いたことを記録できる方策を整えた。

#### ◆ 本年度の成果

- システムは試行段階であり、使い勝手に多くの課題もあるが、教員からの記録も少ないのが現状である。

## ■ 来年度への課題と改善への展望

システムの改善等は本校が単独で行えるものではなく、京都市教育委員会との連携のもと改善を進めていく必要がある。

### (d) 生徒支援にあたってのプランの評価方法

#### ◇ 取組内容

現在、生徒の学習態勢を整えるための「困り」の状況をアセスメントし、解決へ向けたプランニングを行い、そのプランを実行している。しかし、実行したプランの評価（プランニングが適切に行えていたか否かの判断）を十分に行うことができずにいる。

適切な評価を行い、次のアセスメントとプランニングに繋げるサイクルの構築が必要であるが、現実には「困り」が改善した場合もしていない場合も十分な評価をできないまま、別の（あるいは次の段階の）案件が生じて対応することが多く、サイクルの構築はできなかった。



## ◆ 本年度の成果

- ① 新入生に関しては、合格決定後の中学校への聞き取りや入学前の本人と保護者への面談によって早い時期から「困り」の状況の把握に努め、支援プランの策定を行った。
- ② プランの評価と改善については、生徒個別の「困り」の状況に応じて必要な生徒に限り、随時行っている。

## ■ 来年度への課題と改善への展望

生徒の学習態勢を整えるための「困り」の状況をアセスメントし、解決へ向けたプランニングを行い、実行したプランの評価（プランニングが適切に行えていたか否かの判断）を適切に行い、次のアセスメントとプランニングに繋げるサイクルの構築をする必要がある。

### (e) SSTの具体的な実施方法

#### ◇ 取組内容

昨年度から1年生・2年生の両方の総合的な探求の時間（総合的な学習の時間）においてSSTの内容を取り入れ始めた。本年度はその充実・改善に取り組んだ。

また、本年度の1年生より通級による指導（以下、「通級」という。）を開始した（校内呼称「生活基礎」）。限られた対象生徒のみであるが必要な生徒へのSSTも始め、自立活動の指導を行った。来年度以降は、学年進行で通級を実施していくこととなっている。

1年生の「総合基礎（総合的な探求の時間の校内呼称）」では、昨年度に引き続きコーピングを中心にした内容においてSSTの要素を盛り込んで授業を行った。

コーピングの手法を取り入れた目的は次の2つである。

- 生徒が自分自身のストレスに対処し、学年・クラスなどで適切な人間関係を築くと共に「心のエネルギー」を高め、学習活動や部活動をはじめ学校生活全般に主体的に参加する態度や能力を身につけさせること。
- 自己理解を深めると共に自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく生きる力を育成すること。

授業実施に当たっては、事前検討会をもち目標や進め方の打ち合わせを行った。企画担当者が指導略案と教材を用意し、授業者（クラス担任）はクラスの実態をふまえて検討をすすめた。授業終了後にも生徒の様子について情報交換を行い次回の改善につなげた。SCも同席し専門家の視点から助言や解説を行いより有効なものにできるよう工夫を重ねた。

本年度は、内容を整理・精選して取り組んだ。充実・改善点は以下のとおりである。

- ・学習時に使用するワークシートを見てわかる簡潔なものに改良した。
- ・心理教育の視点でSCによる講話の機会を設けた。
- ・授業開始時に授業へ入る気持ちの切り替えとして短時間（5～10分）の集中タイムを設け、コグトレに取り組んだ。生徒に好評で楽しんで取り組んだ。アセスメントの

機会にもなり生徒理解を深められた。

- ・SSTの要素を盛り込んで授業を行った。コミュニケーションの技術・アサーションの技術・グループワーク・SSTゲーム等の充実を図った。
- ・年間を通じて学校生活を捉えられるよう行事（文化祭、体育祭等）や長期休業の振り返りを行った。
- ・学んだ事の確かめとして「ストレスマネジメントクイズ」や「一年間の振り返りシート」の記入をした。
- ・1年生を終える「今」の時点で、将来について考える機会を設けた。「Planning Tomorrow with Hope(希望に満ちた未来の計画)」に記入しながら近い将来についても考えた。

年間の学習計画は以下のとおりである。次の5つのエクササイズを配置してある。

- (1) 導入：この授業で学ぶことを知る。自分の行動について知る。
- (2) 認知：人との関係でストレスを感じたときどうするか等「考え方」について学ぶ。
- (3) 行動：ストレスを小さくして人間関係をつくる方法を具体的に学ぶ。
- (4) 情動：身体と心を楽しにするリラックス法等を知る。
- (5) 総合：SSTゲームやグループワークを体験し、日常生活に活かせるよう練習する。

※ コグトレは児童精神科医・医学博士宮口幸治氏が開発した、みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング。

#### 「総合基礎」年間実施内容

回	取組内容		備考
1		KJQマトリックスを実施	
2	導入①	オリエンテーション プロフィールシートで名刺交換	
3	導入②	自分を知ろう SRS-18アンケート	
4	導入③	自分を知ろう TAC-24アンケート	
5	認知①	気持ちはどこからくるの？	
6	認知②	ABC「こころの法則」	
7	認知③	いろいろな考え方をしてみよう！	
8	認知④	認知を変えてストレスを小さくしよう！	
9	情動①	リラックス法（呼吸法）を知ろう	1学期振り返り
10	行動①	相手の話を上手に聴こう！ ～コミュニケーションの技術①傾聴～	夏季休業振り返り
11	行動②	質問をしてみよう！ ～コミュニケーションの技術②～	

12	行動③	答え方を工夫してみよう！ ～コミュニケーションの技術③～	
13	情動②	自己開示ゲーム「アンゲーム」 ジョハリの窓	体育祭振り返り ジョハリの窓 講話
14	行動④	言いたいことをうまく伝えてみよう！ ～アサーションの技術①～	
15	行動⑤	気持ちのよい断り方，頼み方をしてみよう！ ～アサーションの技術②～	
16	行動⑥	上手な謝り方をしてみよう ～アサーションの技術③～	文化祭振り返り
17	行動⑦	認知と行動の合わせワザでストレス解消	
18	情動③	気持ちのコントロールをしてみよう！ ～怒りへの対処～	温怒計

19	総合①	グループワーク「SSTすごろくゲーム」を楽しもう	新年を迎える
20	総合②	KJQマトリックスの結果を比べてみよう①	KJQマトリックス 結果返し
21	総合③	KJQマトリックスの結果を比べてみよう②	ストレスマネジメント クイズ
22	総合④	「問題を解決してみよう！」 グループワーク「無人島脱出ゲーム」	
23	総合⑤	1年間のまとめ 自分の成長を振り返る 将来について考えよう「幸せの一番星」	心の器イメージ講話 1年間の振り返り

※ KJQマトリックスは早稲田大学人間科学学術院の菅野純氏と教育現場に立つ教師が共同で開発した教材。「こころの土台」を構成している「こころのエネルギー」の充実度と「社会生活の技術」の成熟度の測定をする。

※ 参考資料

- ・「人間関係スキルアップワークシート」学事出版株式会社・菅野純他著
- ・「マイ・ライフ・デザイン～自立へのナビゲーション～」東京都教育委員会

2年生の「総合進路（総合的な学習の時間の校内呼称）」は、本年度より配置されたSCCのアドバイスを得ながら、授業内容の改善に取り組んだ。特にコミュニケーション能力の向上を目標として、発表やグループワーク（自分の考えを表明する，他者の発表を聴く，グループで発表する）に力点を置いた。また早いうちから進路について調べ，自分の卒業後の姿を想像させる内容に取り組んだ。

「総合進路」年間実施内容

回	取組内容	備考
1	総合進路について - ガイダンス	[プレゼン練習] [グループワーク]

2	レッツスタート 高校2年生 (1)	
3	レッツスタート 高校2年生 (2)	
4	資格検定について (1) 調べてみよう	[調べ学習] [グループワーク]
5	資格検定について (2) 調べてみよう	[調べ学習] [グループワーク]
6	資格検定について (3) 発表しよう	[プレゼン①]
7	レディネステスト 分析 職業 いろいろ発見 (1)	
8	職業 いろいろ発見 (1)	
9	職業 いろいろ発見 (2) CALL+オープンキャンパスについて	[調べ学習]
10	オープンキャンパス行きましたか? +奨学金制度を知ろう	
11	企業とその仕事を知る 様々な働き方の特徴と違い	
12	仕事選びのステップ (1) 仕事を選ぶ4つ(3つ)の視点・求人票の見方	
13	仕事選びのステップ (2) 3社の求人を比較して ワークシート作成	[グループワーク]
14	仕事選びのステップ (3) 3社の求人を比較して ワークシート作成	
15	仕事選びのステップ (4) 3社の求人を比較して	[プレゼン②] [グループワーク]
16	自己PRスキルズ (1) 自己PRについて考えよう	
17	自己PRスキルズ (2) 自己PRのための自分分析	
18	自己PRスキルズ (3) 自己PR文を書こう ①	
19	自己PRスキルズ (3) 自己PR文を書こう ②	
20	自己PRスキルズ (4) 志望動機を審査してみよう	[グループワーク]
21	自己PRスキルズ (5) 志望動機の審査を発表しよう	[プレゼン③] [グループワーク]

22	自己PRスキルズ (6) 就職用の履歴書(志望動機)を書いてみよう	
23	面接試験トレーニング (1) 面接の基本 マナーを知ろう	
24	面接試験トレーニング (2) 面接 実践してみよう 評価してみよう	[ロールプレイ]
25	面接試験トレーニング (3) 面接 まとめ 振り返ってみよう	

#### ◆ 本年度の成果

それぞれに生徒の変容につながっている。1年生の「総合基礎」は生徒にとっては経験したことのない内容であったが、自己理解を深めストレスについて考えるよい機会となった。普段は話すことのない人と話をし、他者の意見に興味をもっている場面が多々あり、集団の中で人間関係を築くうえで役立っていた。昨年度と本年度の取組で内容と教材の充実が図れた。また、授業担当経験者も増え今後につながると思われる。

また、本年度より取り組み始めた通級の授業においては、各自の困りに応じた活動を設定するなど、個に応じたきめ細かい支援を重ねることができ、生徒には自分から活動に参加し、自己表現する場面が見られるなどの変容がみられた。

2年生の「総合進路」は、本年度より進路担当に加えて担任が授業に入ることになり、生徒の実態や意思をより身近に把握できた。また、本年度よりSCCが配置され授業内で講義を行った。年間を通じて内容の整理・充実が図られた。

#### ■ 来年度への課題と改善への展望

1年生の「総合基礎」は自己理解から始まって、具体的なソーシャルスキルを学びながらストレスマネジメントができるよう取り組んできた。また、1年間を見通して捉える仕掛けを試みたが、もう少しキャリア教育の視点を取り入れ将来に関心をもって「今」を生きられるような取り組みにしたい。そうすることで、2年生の「総合進路」につながる事となる。

上記の通級「生活基礎」のように効果がある取組を一般に広げる方策を検討することは有意であると考えられるので、来年度以降に検討を行いたい。

### (2) 学習指導方法と評価方法の確立

#### (a) 学習指導方法の確立

##### ◇ 取組内容

研究2年目となる本年度は、「① 学習障がいの診断を受けている生徒」・「② 不登校の経験により未学習があると考えられる生徒」・「③日本語運用能力が不足している外国人生徒」の持つ「困り」を「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管

理」という6項目で評価した。対象生徒は教科担当者の見取りにより1年生の中から12名を選定した。生徒の「困り」の改善を評価するために、指導法の運用前後に教科担当者による学習状況の診断を「学習状況のチェック表」(巻末 **資料1**) によって実施し、その結果を分析して指導法の評価を行った。

なお、以下のような年間のスケジュールで取り組んだ。

5月下旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 事例収集の対象を決定。</li> <li>1) 対象生徒を、様々な困りに対して、対応方法が身につけられていないと考えられる1年生の中から決定。</li> <li>2) 1年生の教科担当者への聞き取りから、授業で何らかの「困り」を感じていると思われる生徒を抽出する。</li> <li>3) 抽出した生徒の中から「個別の指導計画」作成対象生徒と通級の対象生徒を考慮した上で対象生徒を決定。</li> </ul>
6月上旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 対象生徒の学習状況の把握。</li> <li>⇒ 1年生の教科担当者が「学習状況のチェック表」に回答。</li> </ul>
6月下旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 対象生徒の学習状況の共有。</li> <li>* 全教員から各教科で取り組んでいる指導法を収集。</li> <li>⇒ 各教員から「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」の6項目において、「実施した支援で効果のあったもの・なかったもの」「実施したことはないが聞いたことがある支援」「成果があったと聞いたことがある支援」などの分類で収集。</li> <li>⇒ 各教科で集約・報告。</li> </ul>
7月～ 8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 指導法の検討。</li> <li>⇒ 報告を受けた実践例をもとに各授業で取り組む内容や指導法をまとめ、「授業のチェックシート」(巻末 <b>資料2</b>) を作成。</li> </ul>
9月上旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 全教員へ指導法を提案。</li> </ul>
10月下旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 指導法について中間評価。</li> <li>⇒ 対象生徒について、1年生の教科担当者が「学習状況のチェック表」に回答。</li> <li>⇒ 回答された結果をもとに指導法の見直し・改善。</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 対象生徒の学習状況の変容と指導法の改善点を共有。</li> </ul>
2月上旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 指導法のまとめ。</li> <li>⇒ 対象生徒について、教科担当者が「学習状況のチェック表」に回答。</li> <li>⇒ 結果を分析、成果をまとめ。</li> </ul>

本年度は、昨年度に作成済みであった「学習状況のチェック表」を6項目に分けて、教科担当者が実施し、生徒の「困り」を点数化して評価することができた。また、指導法については、現在までにすでに各教科で工夫されていたものをまとめて、チェックリスト化した。これにより各教科で行われている取り組みを共有することができた。

① 「学習状況のチェック表」について

昨年度行った研究をふまえて生徒の「困り」を「書く」・「話す」・「聞く」・「切り替え」・「時間の管理」・「物の管理」という6項目11観点に整理し、観点毎に3点満点で調査するものである。本年度は1学期と2学期、3学期に各1回実施し、それぞれの評価を用いて生徒の変化を分析した。

② 「授業のチェックシート」について

各教科で行われている指導法をまとめ、チェックリストを作成した。その際に、ユニバーサルデザインの観点から本研究の対象生徒だけでなく、すべての生徒が学びやすい授業にするために、各項目を作成した。項目については、「学習状況のチェック表」の6項目に合わせた。また、授業内で情報を視覚化することが効果的と考えて、重視した。

③ 「自己目標マップ」(巻末 **資料3**) について

「学習状況のチェック表」の分析結果から、対象生徒は「時間の管理」や「物の管理」に「困り」を持つことがわかった。そこで、生徒が自分自身で目標を立て、見通しを持って行動できるようにすることで、上記2項目が改善されていくのではと考えた。「自己目標マップ」を生徒たちに書かせることで、考査までの授業回数を認識させた。また、実施目的には、目標達成に向けて、毎時の自己評価を繰り返しさせることで、見通しを持って行動できるようにさせるということもある。

◆ 本年度の成果

「授業のチェックシート」については、作成時に多くの教員が「困り」を持った生徒たちに様々な支援・指導を行っており、それらを全教職員で共有することができた。

本年度3回実施した「学習状況のチェック表」の結果を比較するためにレーダーチャートに表した。図1は対象生徒の平均値である。

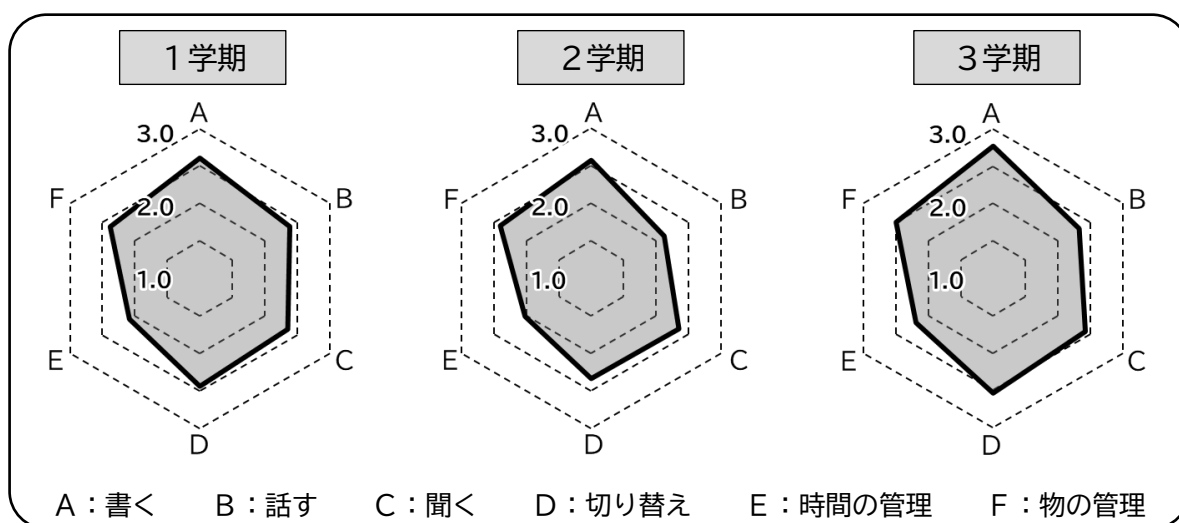


図1 「学習状況のチェック表」生徒全体の平均値の推移

「書く」の項目が他の項目に比べて、生徒の「困り」が小さくなっているという結果を得た。この「書く」という項目については、教員へのアンケートから授業内で工夫や意識

をしているという実施数が28種類であり、他の項目に比べると多かった（例えば「話す」が19種類、「聞く」が11種類）（表1参考）。このことから、多種多様な取り組みを行うことで生徒の授業に対する「困り」が小さくなっていくと考えられる。また、「時間の管理」に「困り」を持つ生徒のために、見通しを持って行動をできるようにする指導も必要であると考え。 「話す」が1学期の値が大きいことは、年度当初は理解できているかの確認のため、クローズ質問が多く、生徒たちにとって答えやすいものが多かったためこの項目の点数が高めに出たのではないかと考えられている。また、「時間の管理」と「切り替え」が2学期に小さくなっていることは、この時期に体育祭や文化祭など学校行事があり、通常時間割とは違い、その中で、見通しを持って行動することが難しい生徒が目立ったためではないかと推測する。以下では、対象生徒の中から、特性が分かりやすい生徒を4名挙げることにする。

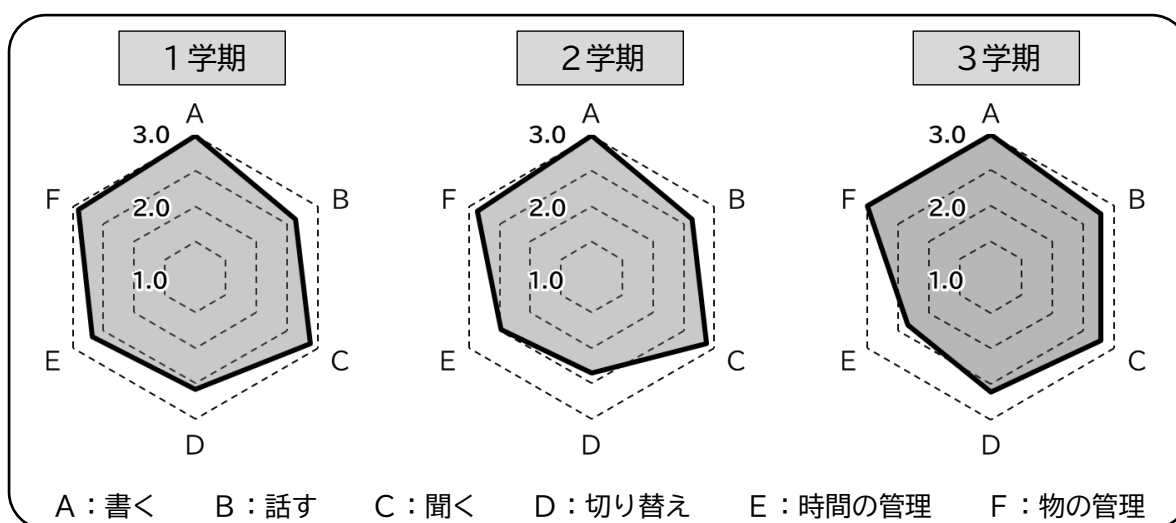


図2 「学習状況のチェック表」生徒Aの推移

生徒Aについては1年間で「困り」が少なくなったと考える。中学2年生からほとんど登校できていなかったが、現在はほぼ毎日出席できている。このように、生徒Aは学校生活が定着しているため、困りが少なくなってきている。

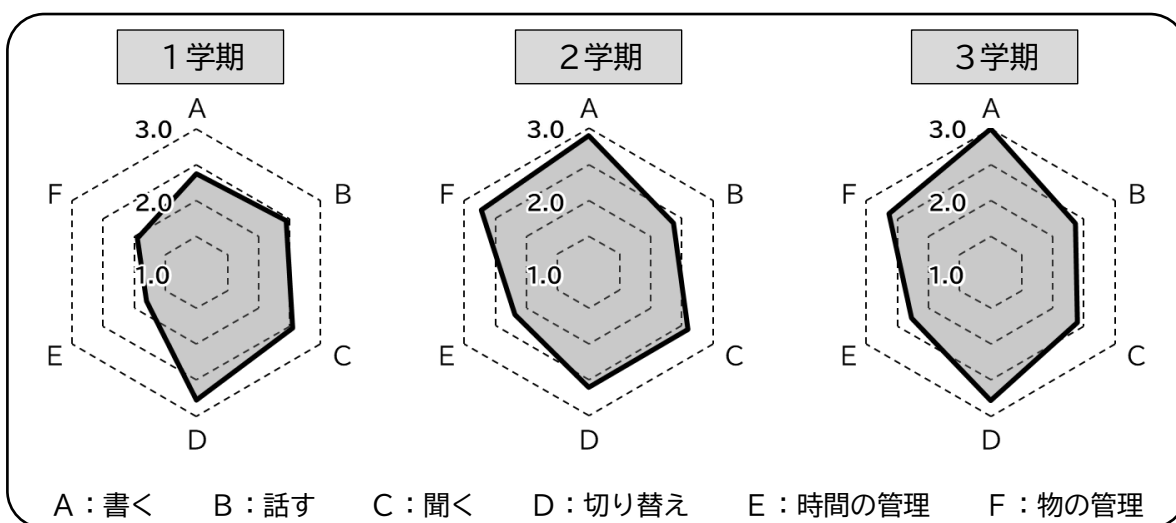


図3 「学習状況のチェック表」生徒Bの推移



生徒Bは「書く」の「困り」の変化が大きい。これは、年度当初の授業ではICTを用いた授業に不慣れであったが、1年間同じ形式で授業を受けることで、授業形式に慣れてきたためであると考えられる。それに加え、生徒Bも生徒Aと同様に中学1年・2年とほとんど登校できていなかったが、ほぼ毎日出席できるように変化した。1学期には不十分であった学習する姿勢が育ったことが「困り」の変化に出ていると考えられる。

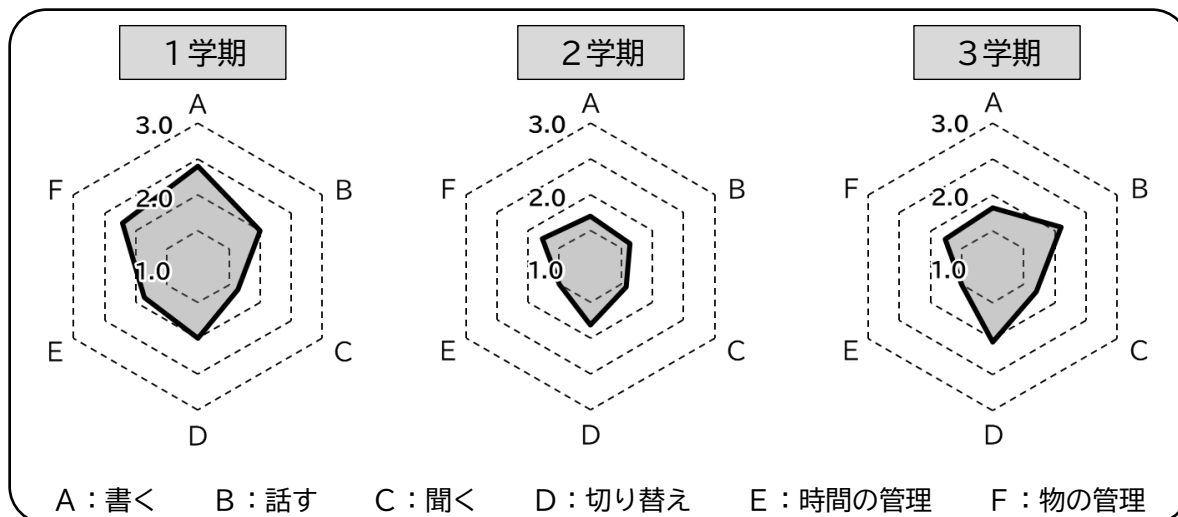


図4 「学習状況のチェック表」生徒Cの推移

生徒Cについては、年度当初の見取りが不十分であったと考える。様々なきめ細かい教職員の指導により、学校に定着することができ、2学期から3学期にかけては、「話す」などの項目で「困り」が少なくなったと考える。

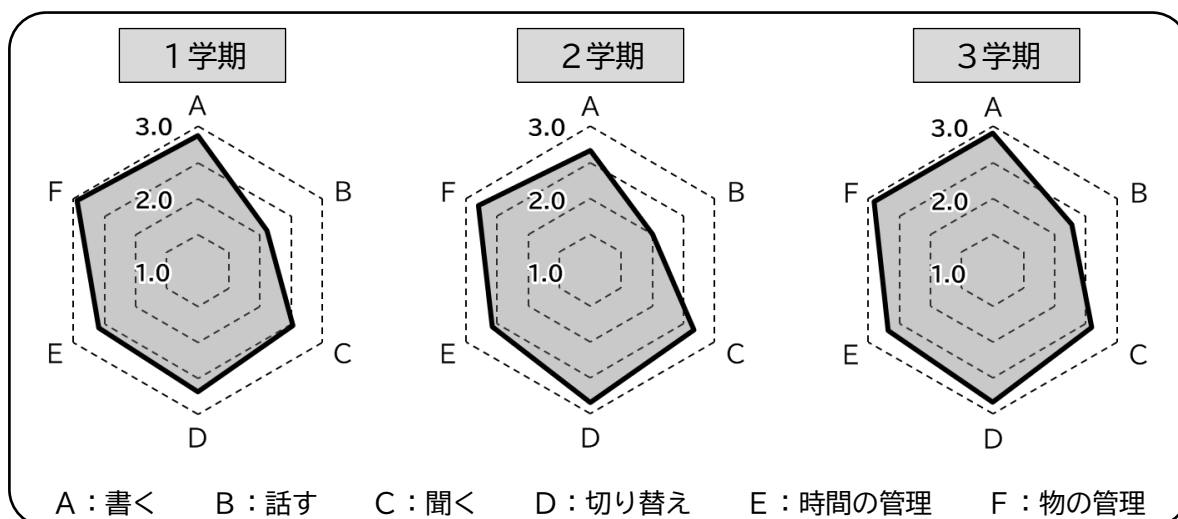


図5 「学習状況のチェック表」生徒Dの推移

生徒Dについては全体平均での考察とは異なり、「話す」という項目に「困り」があることが分かる。レーダーチャートにすることで、発達の凹凸が学校全体で共有しやすいものとなった。

指導法の効果については、「学習状況のチェック表」と「授業のチェックシート」との相関を求めることで評価した。その結果としては、相関係数が0.638であった。このことから、今回の指導法にはまだまだ改善の余地があると考えられる。加えて、相関を求める以

外の分析方法についても検討できる余地があると考えている。

表1 各教科での授業内での工夫や意識のまとめ

「書く」
<p>【国語科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 一番初めの授業で、ノートを使い方を説明する。(その後のノート集めの際に、見本となる生徒のノートを皆に紹介する)</li><li>○ 授業時間の初めに、黒板にタイトルと教科書のページを書く。</li><li>○ プリント教材やテストを作る際には、字体や文字の太さ、行間を工夫する。</li><li>○ テストでは問題の配置を工夫する。(問題文と問題がプリント1枚で完結するように作る)</li><li>○ プリントやテストでは解答する場所がわかるように枠を使う。</li><li>○ プリントの空欄と参照箇所の番号を一致させる。(事前に全体に向けて説明する→やり方がわかると自主的に活動するようになる。説明の時に休んだ生徒にはその都度説明する)</li><li>○ 板書の際には、文字の大きさや色(2~3色)を使い分ける。</li><li>○ 前回のノートの書き終わりを確認する。(休んだ人のために前々回からどのくらいスペースを空けるか確認する)</li></ul>
<p>【地理・歴史科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ ノートに写す時間を確保する。</li></ul>
<p>【公民科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ パワーポイントを用い、生徒の記述を減らす。視覚情報での補助になる。</li></ul>
<p>【数学科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ iPadとApple Pencilを利用して、プリントへの記入の様子を投影する。</li><li>○ 1年次の授業ではティームティーチング授業を実施し、板書をノートに写す際に困りを抱える生徒への机間指導を行う。</li></ul>
<p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ プリント記入欄に通し番号を振り、どこに何を書くか明確にする。</li><li>○ プリントをビデオカメラで写し、モニターに提示して書く場所と内容を分かるようにする。</li></ul>
<p>【保健体育科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 絵や図を挿入して、理解しながら板書できるようにする。</li><li>○ 余裕をもって文字が書けるようなポイント数にする。</li><li>○ 板書の字数を減らす。</li></ul>
<p>【芸術科】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 課題についての説明をする最初の時間に、その内容・注意点・目標などを黒板に表示する。課題の制作進行中はそれらをその都度再表示する。</li></ul>

<p><b>【英語科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ プリントサイズ、使用する文字の大きさとして（A 3,基本 1 2 pt）を選択し、生徒が書く文字の大きさを調節する。</li> <li>○ 英文や単語等を載せておいて、シートの書き写す量を調節する。</li> <li>○ 生徒が使いやすい罫線やマスの大きさ、行間等を選ぶ。</li> <li>○ I C T教材で提示するKeynoteを印刷して渡す。</li> <li>○ ティームティーチングの教員が声をかける。</li> </ul>
<p><b>【家庭科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ プリント：サイズはA 4で、文字は 1 2 pt 丸ゴシックPROに統一している。</li> <li>○ 難しい字にはふりがなをうつ。</li> <li>○ 本日のテーマを、黒板の左上にずっと書いておく。（板書が進んでも消さない）</li> </ul>
<p><b>【商業科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 電子黒板を利用する。（簿記）</li> <li>○ プリントはルビを付ける。</li> </ul>
<p><b>「話す」</b></p>
<p><b>【国語科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 授業のはじめは、前の時間の話の振り返りから始める。</li> <li>○ 発問の頻度を多くする。（一問一答で答えやすい簡潔な問い方にする）</li> <li>○ 音読の機会を多く持つ。</li> </ul>
<p><b>【地理・歴史科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ （使いやすい平易な言い回しで）普通に話す。</li> </ul>
<p><b>【公民科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ （使いやすい平易な言い回しで）普通に話す。早口にならないように気をつける。</li> </ul>
<p><b>【数学科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ テスト前の授業など（単元の区切り）で、生徒同士で教えあう時間をとる。</li> </ul>
<p><b>【保健体育科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ グループワークの場合、テーマに沿って 3 ～ 4 人で話し合う。グループの代表者が発表する。（保健）</li> <li>○ チームスポーツの場合、各チームで作戦を立て、試合の反省をする時間を持つ。（体育）</li> </ul>
<p><b>【芸術科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 取り組んでいる制作内容について、授業の開始時間に繰り返し説明を行い、認識を深める。</li> </ul>
<p><b>【英語科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ （プリント）難しい単語・語句にカタカナで発音を表記する。</li> <li>○ （プリント）2 ～ 3 語程度（まとまった意味グループ）ごとに斜線で区切った英文</li> </ul>

を使って読む。

- 全体での音読は教員も加わる。苦手な生徒の横と一緒に音読する。
- ペアでの音読は、読む人と聞く人の役割を明確にする。
- 音読テストは上級編をおき、チャレンジの機会を与える。
- 教員間で、困りをかかえた生徒の情報を共有する。授業中の巡回にいかす。

#### 【家庭科】

- 振り返りシートに記入させる。毎時間、授業の最後に記入・提出させる。わからないことや質問に対しては、返事を書いて次の時間に返す。その中でも共有した方が良いと思うものは、全体の前で説明し、振り返りを丁寧にする。
- 全体の前で発表をするときには、苦手でも話すことができるように自分の意見をまとめる用紙を作り、それを記入する時間をとる。

#### 【商業科】

- 聞き取りやすい、大きめの声で、ゆっくりと、間を大切にする。
- 授業の前にアイスブレイクをする。

### 「聞く」

#### 【公民科】

- (活動などを反復して行い) 聞くことに慣れさせる。

#### 【数学科】

- 話を聞く場面と問題を解く場面の区別を行う。

#### 【保健体育科】

- こちらに注目させてから話を始める。

#### 【芸術科】

- 机間指導時等に制作途中作品の制作意図や完成目標などを個別に聞く。また完成作品についての感想を聞く。

#### 【英語科】

- ゆっくりと具体的に話す。
- 教員が口頭で説明する時に、ワークシートの内容を電子黒板に提示する。
- 電子黒板にはポイントがわかるように色ペンを使う。
- 画像や動画でイメージを持ちやすくする。

#### 【家庭科】

- (調理実習) レシピについては事前の授業で全員に配布してポイントを説明する。当日、一斉に最初の説明を行うが、全体への説明ではなかなか個人に指示が入りにくいため、視覚に訴えるよう、ホワイトボードへの掲示をする。
- レシピカードの一角に書かれている、野菜の切り方については、1つの野菜につき一枚(B5)になるよう拡大し各調理台に置く。

## 【商業科】

○ 生徒に（授業で学んだ）用語に関連させて、意見をきく。

### ■ 来年度への課題と改善への展望

本年度は「授業のチェックシート」と「自己目標マップ」を実施した。

「授業のチェックシート」については、運用状況が不十分であると感じる。課題としては、リストの項目数が多かったことなどが挙げられるため、さらに項目を精選する。

「自己目標マップ」については、8割近くの生徒たちは目標を立てることの重要性を感じている。また、授業回数を事前に伝えることで、見通しを持って行動できるようになったと感じる生徒は9割以上いた。しかし、毎回の授業を振り返り、自己評価をすることを苦手とする生徒は半数ほどいる。振り返りや自己評価の方法を指導するだけでなく、重要性も伝えていくことが大切である。来年度は「困り」の改善に繋がっていたかなどの観点で「自己目標マップ」の結果の分析を行っていく。

#### (b) 評価方法の確立

##### ◇ 取組内容

現状は教科ごとに、必要に応じて生徒に合理的配慮を行っている。個別の状況に応じた評価方法が必要となるのかどうかについての検討を試みようとした。

##### ◆ 本年度の成果

「困り」のある生徒個々の状況理解が進むのに伴って学習指導法が改善されていくと、特別な評価方法を使うことなく他の生徒と同様に評価ができるようになるケースがほとんどであった。

### ■ 来年度への課題と改善への展望

指導法を改善しても学習内容の定着が見られないなど単位認定に支障がある場合には、不認定とせざるを得ないのか、別の評価方法を用いることで単位認定につながるのかを検討するまでには至らなかった。

来年度は、新しい視点を取り入れたルーブリック等を作成することによって評価方法を改善できないか検討を行いたい。

### (3) 支援を支える教職員の知識・理解の深化

#### (a) 研修を通じた教職員の知識・理解の深化と意識の変革

##### ◇ 取組内容

本年度は、次の3つの観点で研修会を企画した。

① 多様なニーズを持つ生徒たちに対応するために、外部専門家等が配置されている。

SC・SSW・SCC，そして日本語指導担当である。各々がどのような役割を持ちどのように生徒と関わっているのかを，日常生活から切り出し視覚化した。効果的な協働をすすめていくために教職員全体で共通理解する機会とする。

- ② 不登校の一因として、「起立性調節障害」と診断されている生徒が少なくない。病理の面，心理的な面等から具体的な知識を得ることで生徒理解を深め日常の指導に活かす。
- ③ 発達障がい診断を受けている生徒が複数いる。あるいは，診断を受けてはいないが，その特性が見られる生徒も多数在籍している。生徒の状態をより細やかに見て困りに気づく「視点」を養う。また，適切かつ有効な指導支援を行うためコンサルテーションを実施する。

令和元年

● 6月13日（木） 教職員研修会

気づきから始まる理解と支援

～「発言や行動からの見取り」から「有効な手立て」へ～

講師：後野 文雄 氏 特別支援教育士スーパーバイザー 元京都教育大学客員教授

内容：通級指導を受講する生徒を中心に個々の生徒のコンサルテーションと講義を通し，生徒の見方や理解の仕方についての見識の深化を図る。

● 6月20日（木） 情報共有・意見交流会

平成31年度1年生対象 KJQマトリックス調査の結果報告

講師：十河 博子 氏 本校SC

目的：1年生対象に実施したKJQマトリックス調査の結果について，その見方を理解すると共に結果を分析。さらに，生徒に対して取れる具体的手立て等の検討を行った。

● 7月19日（金） 教職員研修会

起立性調節障害の病理理解とその対応

講師：水谷 翠 氏 北摂総合病院小児科医師

内容：既往症歴の中に目立つようになってきた「起立性調節障害」について知識を深め，生活習慣の乱れにつながっていきやすい“朝起きられない”についての理解につなげる。

● 9月19日（木） 情報共有会

学習指導法の確立に向けて 指導方法提案 実行委員会より

目的：学習指導法の開発に当たり，対象生徒を絞ったうえで授業における状況や指導上工夫していることなどを共有・交流する。

意識調査アンケートの結果報告 実行委員会より

目的：1学期に実施した意識調査アンケートの結果を共有して今後の課題等の理解を深める。

● 10月24日（木） 教職員研修会

関係機関連携と社会資源の活用

講師：三木 泉 氏 本校SSW

内容：複雑化している生徒の環境を、高校生が使用できる社会資源を使うことで、今後の支援の充実に活かす。SSWとの協働について、新たな知見を得ながら理解を深める。

● 12月5日（木） 教職員研修会

学習指導法の確立に向けた取り組み

講師：木崎 晴美 氏 本校日本語指導担当

内容：日本語を母語としない生徒の学習指導法について実施の状況と成果について情報を共有する。

報告：実行委員会

内容：様々な困りを持つ生徒の学習指導法について研究の進捗状況と実施例の共有をする。

令和2年

● 1月23日（木） 教職員研修会

進路状況と定着に向けた就労支援

講師：瀧本 佐都子 氏 本校SCC

内容：本校の進路状況の情報共有と就職先への定着に向けた就労支援について知識の向上を図る。

● 2月6日（木） 教職員研修会

気づきから始まる理解と支援 その2

～「発言や行動からの見取り」から「有効な手立て」へ～

講師：後野 文雄 氏 特別支援教育士スーパーバイザー 元京都教育大学客員教授

内容：6月の研修会の後、通級による指導を受講した個々の生徒の変容をもとにコンサルテーションを行った。個々のケースについて意見交流をすることで、生徒の見方や理解の仕方についての見識の深化を図り、今後の指導・支援につなげる。

● 3月19日（木） 教職員研修会

本年度の研究まとめ

報告：実行委員会

内容：研究の成果と課題について共有する。先進校視察報告をする。

## ◆ 本年度の成果

合計9回の研修会を開催した。日々の実践等の経験もあり、教職員の知識や理解は深まっていると考えられる。また、生徒についての意見交流会等の取組により生徒支援への認識の変革も一層進んできた。また、調査研究の内容を報告・共有する場としての機能も果たした。研修会の際の事後アンケートの記述により、教職員の理解の深まりや意識の向上が伺えると共に意見を得る機会にもなった。今後の課題として活かしていく。

事後アンケートへの教職員の記述より

- 「起立性調節障害」について具体的な話でとてもわかりやすかった。生徒の顔が思い浮かび、本人や保護者への対応に役立てられる。また、心理的な要因もあるということがわかりアプローチの考え方が広がった。
- 「学習指導法の確立」について、現状が視覚化されよくわかった。合理的配慮の必要性を改めて感じた。他の先生方の授業の工夫について知ることができ参考になった。誰もがわかりやすい、参加しやすい授業を目指そうと思った。
- 「関係機関連携と社会資源の活用」については、生徒たちが安心して学ぶためにも外部機関と連携し環境を整える必要性を感じた。関係機関や社会資源の説明はわかったが、スクールソーシャルワーカーの仕事内容も含め、本校に合った具体的事例があればより良かった。
- 「日本語指導」については、内容や該当生徒の現状がよくわかった。普段の活動について知ることができて良かった。生徒理解のために情報発信・情報共有は大切だと感じた。  
「学習指導法」については、支援の方法も含めて生徒の個別の聞き取りがあっても良いのではないかと感じた。
- 「進路状況と定着に向けた就労支援」については、就労後の定着について心配がある。高校生で伸ばしてほしい能力について更に聞きたかった。発達障害の人に対する接し方の事例は、本校の生徒にも当てはまる所があり活用できると思った。そういう見識を身に付けたい。
- 「気づきから始まる理解と支援」については、6月・2月の2回実施であった。6月は、発達障害の特性に気づく目を養うための研修、2月は、個々のケースについて意見交流をし、講師からアドバイスを受ける機会であった。  
発達障害の特性についてもっと知りたい。また、生徒への対応・指導法などをもっと学ぶ機会があればよい。生徒によっては、全体で理解・対応をすすめるケース会議が必要である。「1を聞いて1しかわからない」だから全てを説明することが重要だと改めて気づいた。経験のある先生と他の先生との理解・共有が大事だと思う。



## ■ 来年度への課題と改善への展望

研修会等による知識・理解の深化は一定程度深まったと考えられる。今後はその知識を実際の場面に活かせるような取組を意図的に企画し、実践力の向上を図りたい。生徒理解と実践力向上のためのキーワードとして

- 情報発信・情報共有（可視化）
- 生徒の個別の聞き取り（対話）
- ケース会議の充実（協働）

について検討し充実させていきたい。

(b) 先進校視察による教職員の知識・認識の深化

### ◇ 取組内容

文部科学省から調査研究指定を受けたことのある学校などを中心に、特色のある取組を行っている高校を2校訪問した。学習指導における工夫、自立活動（通級による指導）の取組、実態把握のための取組の実際等について情報を得ることとした。

令和元年

- 10月16日（水） 兵庫県立西宮香風高等学校

目的：学力保障のための指導法および通級指導の実際についての視察

令和2年

- 2月21日（金） 長野県箕輪進修高等学校

目的：学力保障のための指導法および生徒の実態把握のための取組についての視察

### ◆ 本年度の成果

学習指導の取組について参考となる特色のある高校を選んで訪問したが、本年度は訪校の数は少なかった。それぞれの取組の中は、参考となるものも多くみられ、有意義であった。

## ■ 来年度への課題と改善への展望

引き続き他校の実践事例に学べるところは学んでいきたいと考えている。

### (4) 調査研究の評価基準となる指標

次の2つを指標として調査研究の評価を行うこととした。

- ① 生徒の進級率や欠席日数、平均評定等の数値：学習指導法の適否を評価する。
- ② アンケートによる意識調査：教職員の達成感の向上と負担感の軽減、生徒および保護者の学校への信頼感などを評価する。

(a) 生徒の進級率・欠席日数・平均評定等

#### ◇ 取組内容

進級率・欠席日数・平均評定等の数値による評価については、研究最終年度に複数年の数値比較により行いたい。

(b) アンケートによる意識調査の結果

#### ◇ 取組内容

アンケートについては、生徒・保護者・教職員を対象に実施している。

第1回アンケートは6月から7月にかけて実施し、第2回アンケートは12月から1月にかけて実施した。

アンケートの設問は変化の様子を図るため、2回とも同じ設問で実施している。

また、一部の設問については昨年度まで2年間取り組んだ研究において実施した設問と同じものとした。これにより長期間の変化を比較した研究成果の検証も試みたい。

なお、アンケートの全集計結果については、巻末に資料として掲載した。(資料4)

#### i) 教職員対象

対象：定時制教職員

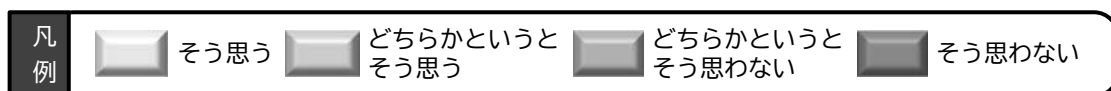
(副校長，教諭，常勤講師，実習助手，養護教諭 計31名)

実施日：第1回 令和元年6月26日

第2回 令和2年1月15日

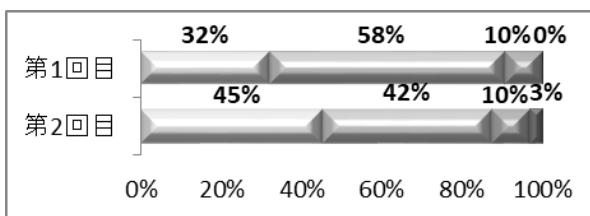
回収数：第1回31名

第2回31名



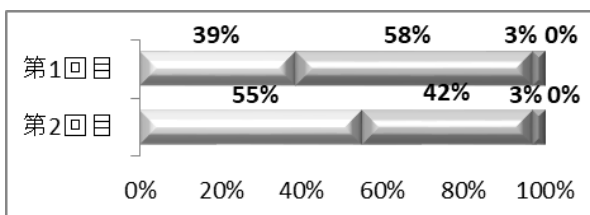
設問1. 支援教育を推進しようという教職員の意識は高い。

グラフ上では、推進していこうとする意識の割合が増えており、強い肯定意識を持つ教職員数が増えていることがわかる。



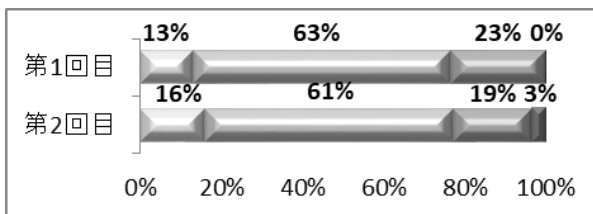
設問2. 教職員に対して支援教育に関する理解啓発が進められている。

強い肯定感を持つ教職員が増えていることから、理解啓発が適切に行われており、また浸透していることがうかがえる。



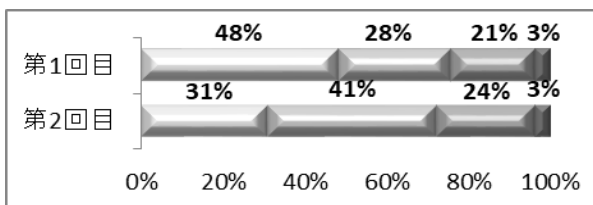
設問3. 学校で行っている支援は、生徒の教育的ニーズに応えられている。

生徒の教育的ニーズに応えられていると考える教職員の割合が約8割みられる。総合育成支援員の複数配置や教科でのチームティーチングなどが効果を上げていると考えられる。



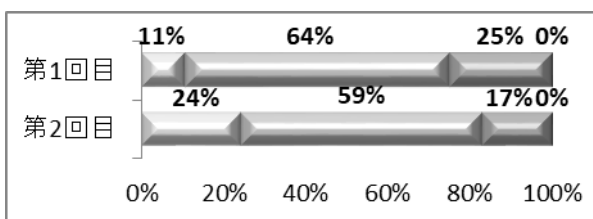
設問4. 授業をするうえで、生徒が抱える事情（学力不振、LD等）に伴って生じる負担感がある。

負担感を強く持つ教職員の割合は約3分の2に減少しているが、約7割の教職員が負担感を持っている。この負担感を減らすための何らかの手立てを検討する必要があると考える。



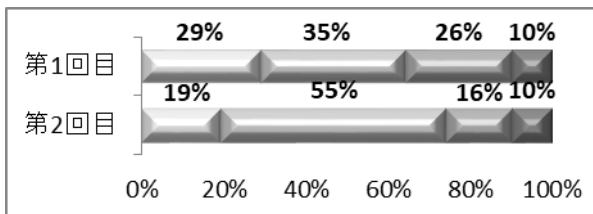
設問5. 支援教育においては、負担に感じる事があっても、達成感を持てる場合もある。

達成感を持つことができるかと強く感じる教職員は2倍に増加している。前問から負担に感じている教職員は多いことがわかったが、この設問からは達成感も感じている教職員は多くいることがわかる。



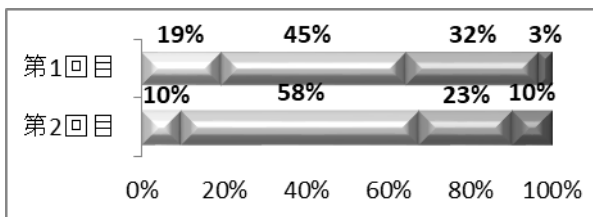
設問6. 生徒の情報は適切に共有されている。

概ね、生徒の情報は適切に共有されている。しかし、約3割弱の教職員は適切に共有されていないと感じているため、今後も適切な情報共有の工夫が必要であると考えられる。



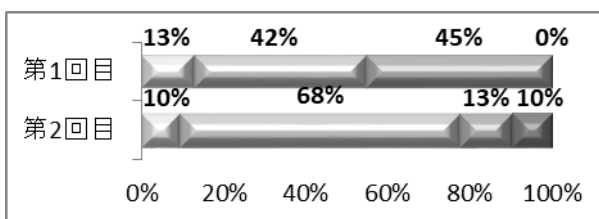
設問7. 情報を適切に活用し、必要な生徒のアセスメントができています。

肯定感を持つ教職員がわずかではあるが増えている。前問の結果からも、共有された情報が活用され、必要な生徒へのアセスメントが適切に行われつつあると考えられる。



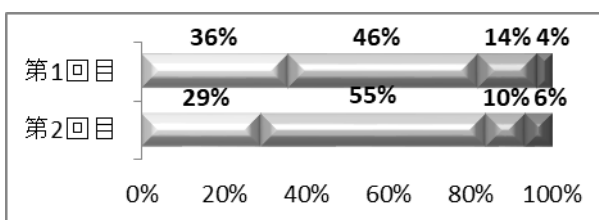
設問8. 支援を必要とする生徒への対応に関して学校全体の共通理解を図ることができている。

肯定感を持つ教職員は増加しているが、未だ2割程度の教職員は共通理解を図ることができていないと考えている。そのため、今後も適切な共通理解を図る工夫が必要であると考えます。



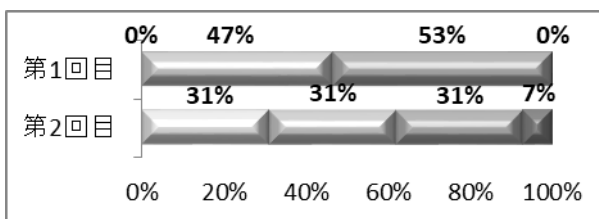
設問9. ケース会議は生徒の指導に効果的である。

ケース会議は生徒の指導に効果的であると考える教職員は多い。本年度はケース会議が必要に応じて行われた。その結果、未だ効果的でないと感じている教職員が2割弱いる。指導に効果的な会議のあり方について検討する必要がある。



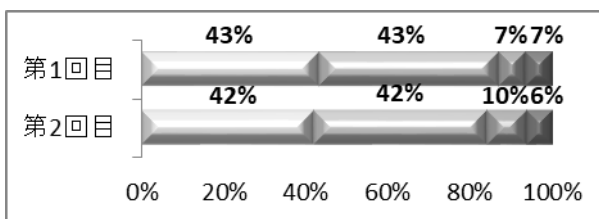
設問10. 生徒個々のニーズに応える学習指導方法の共有ができている。

強い肯定感を持つ教職員が大幅に増えている。これは、今回の研究のテーマを踏まえた取り組みの結果が表れていると考える。しかし、未だ約4割の教職員が共有できていないと感じているため、今後も引き続き共有方法を検討していく必要がある。



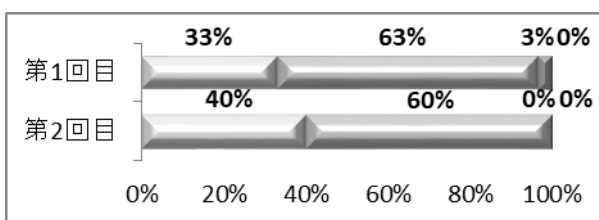
設問11. SC・SSWとの協働は、支援教育の充実に役立つ。

肯定感を持つ教職員は8割以上いる。多くの教職員が専門職との協働は支援教育の充実に役立つと捉えていることがうかがえる。



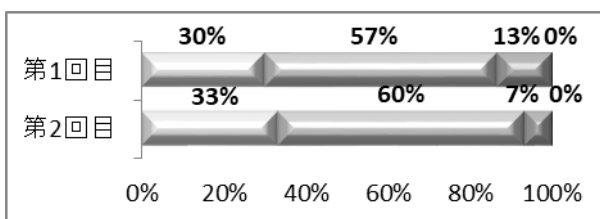
設問12. 教室の環境を整え、生徒が落ち着いて授業を受けられるようにしている。

生徒が落ち着いて授業を受けられるよう、教室の環境が整っていることがうかがえる。携帯電話のマナー指導や視覚教具を取り入れた授業への転換などによる成果が表れていると考えられる。



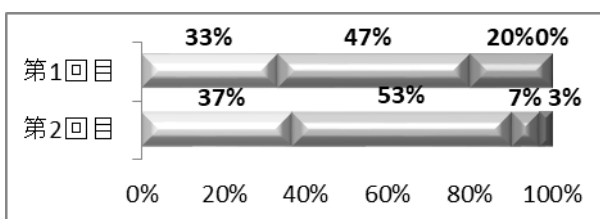
設問 13. 授業の中で、工夫した教材（ワークシート等）を用いて学習しやすいようにしている。

ほとんどの授業で、生徒が学習しやすいように教材を工夫されていることがわかる。今後、この工夫を共有できるツールを作り活用していくことが必要であると考ええる。（設問 10 参照）



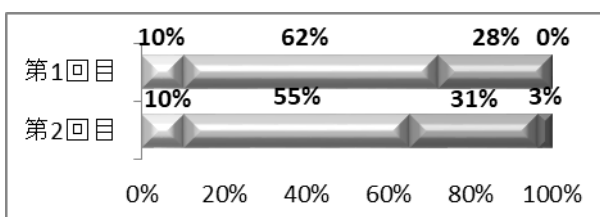
設問 14. 授業において、視覚に訴える教具（プロジェクタやタブレット等）を使用した工夫をしている。

視覚に訴える教具を使用する授業は着実に増えている。これは iPad・プロジェクタや電子黒板などが整備され活用されている授業が増えた結果の表れと考える。



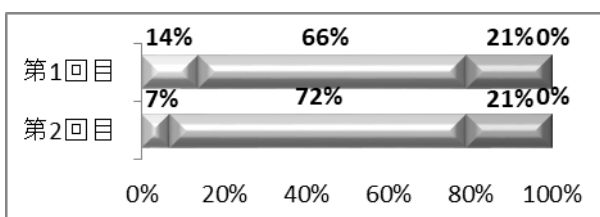
設問 15. 授業以外の学習指導（補習、自宅学習課題等）において、特別な教育的支援が必要な生徒も学習しやすいような工夫をしている。

強い肯定感を持つ教職員は変化がないが、肯定感を持つ教職員は減少している。このことから、対象となる生徒の困りが解消されつつあることがうかがえる。



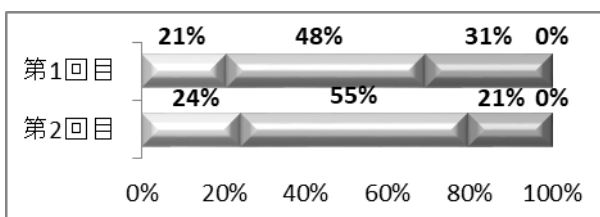
設問 16. 授業および授業以外の学習指導において、生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れている。

強い肯定感を持つ教職員は減少しているが、肯定感を持つ教職員と合わせると約 8 割の教職員が生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れている。



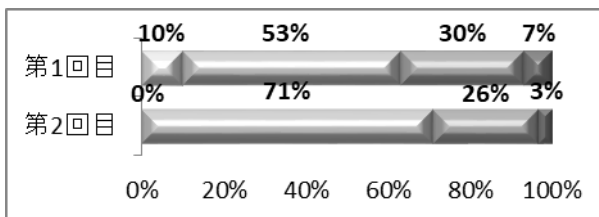
設問 17. 特別な教育的支援を必要とする生徒の理解を促すために、教材・教具等を工夫している。

特別な教育支援を必要とする生徒に対して多くの授業で教材・教具の工夫はされており、その割合が徐々に増えていることがわかる。



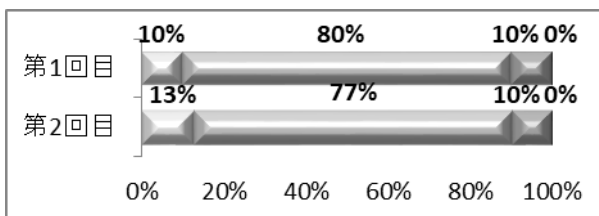
設問 18. 生徒に学習意欲があると感じる。

肯定的な感想を持つ教職員が増えつつある。更に、生徒に対し学習に向かわせるための工夫を考えていかなければならない。



設問 19. 生徒が学校生活に満足していると感じる。

概ねの教職員は、肯定的に感じている。前問を踏まえて見ると、生徒たちは学習面でも学習面以外でも、学校生活を満足して送っていると感じている教職員は多いと考えられる。



■ 教職員全体を通しての考察

- \* 支援教育に関する意識・理解をしている教職員は増えていると考えられる。
- \* 本校で行っている支援教育が適切に理解・推進されていることが表れている。
- \* さまざまな授業において、教材・教具等の工夫がされている。更に、共有することで生徒により良い学習の場を提供出来ると感じる。特に、特別な教育的支援が必要な生徒に対しての教材・教具等においては、さらに研究していく余地がある。
- \* 学習意欲があまり感じられない生徒に対し、その原因の追究や学習意欲の向上を図る方法を模索し検討することが、大きな継続課題である。

ii) 生徒対象

対象：定時制全生徒

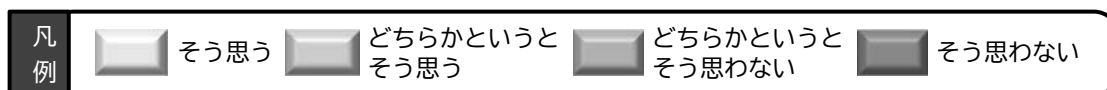
(1年生53名, 2年生44名, 3年生36名 計133名)

実施日：第1回 令和元年6月26日

第2回 令和2年1月15日

回収数：第1回119名(1年生41名, 2年生43名, 3年生35名)

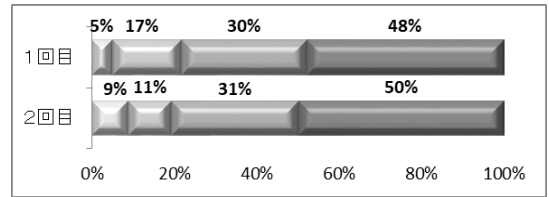
第2回115名(1年生44名, 2年生38名, 3年生33名)



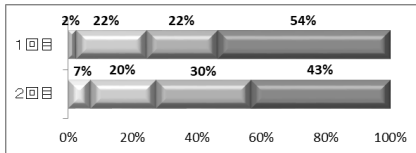
設問1. 文章を読むときに困ることが多い(例 語や行をとばして読んでしまう。繰り返し読んでしまう。など)。

読むことに対して8割以上の生徒が困りを感じていない。様々な工夫や支援の成果がみられる。しかし、強く困りを感じる生徒が増えている。個々の生徒の状況を精査する必要がある。

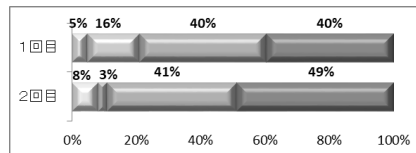
全生徒



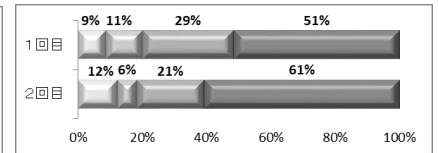
1年生



2年生



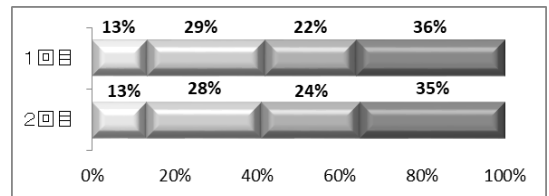
3年生



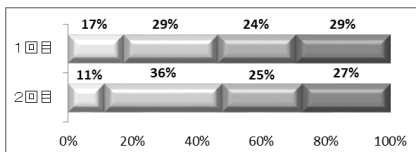
設問2. 話をするときに困ることが多い(例 思ったことをすぐ話してしまう。自分の気持ちを言葉にして伝えるのが苦手。など)。

話すことに対して困りを感じる生徒が1年生や2年生では減少していることから、様々な経験を通してコミュニケーション力が少しずつ身につけてきていると考えられる。3年生には進路対策と合わせて支援方法を考える必要がある。

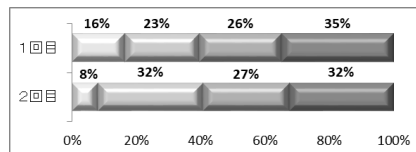
全生徒



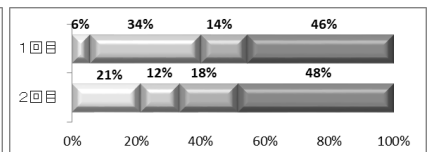
1年生



2年生



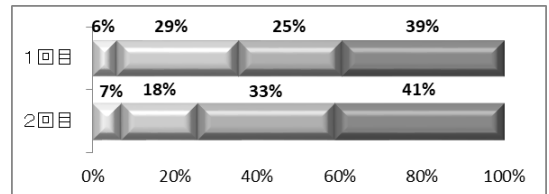
3年生



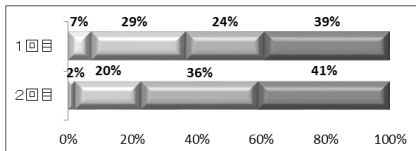
設問3. 書くときに困ることが多い(例 書き間違いをよくする。字を書くのが遅い。など)。

書くことに対して困りを感じる生徒が減少していることから、適切な支援が行われ、その成果が表れている。しかし、3年生では強く困りを感じる生徒が増えている。

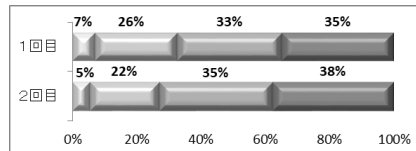
全生徒



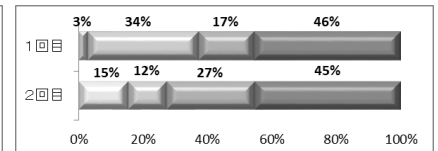
1年生



2年生



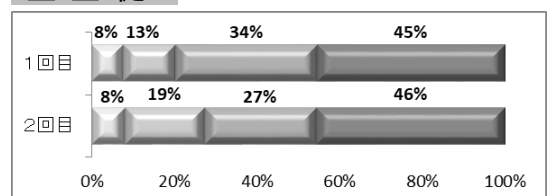
3年生



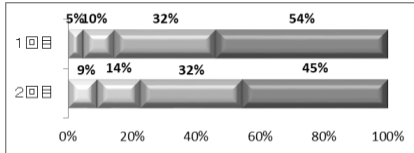
設問4. 聞くときに困ることが多い(例 「知った」を「行った」と聞き間違える。など)。

全体では7割以上の生徒が聞くことに対して困りを感じていない。しかし、1年生や2年生では困りを感じている生徒が増えている。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。

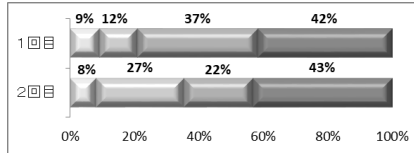
全生徒



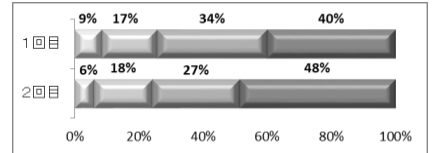
### 1 年生



### 2 年生



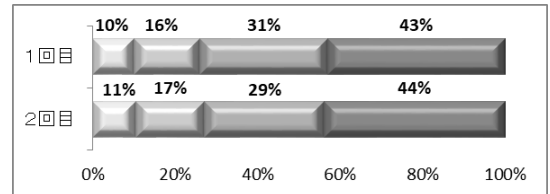
### 3 年生



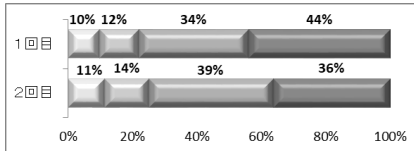
設問5. 落ち着いて物事に取り組むのに困ることが多い（例 物を忘れてきたり無くしたりする。じっと座っているのが苦手。など）。

7割以上の生徒が落ち着いて物事に取り組むことができている。しかし、1年生や2年生では困りを感じている生徒が増えている。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。

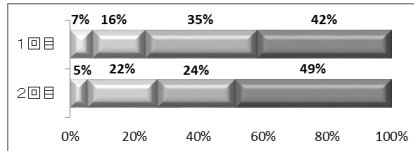
### 全 生 徒



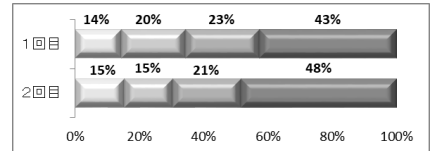
### 1 年生



### 2 年生



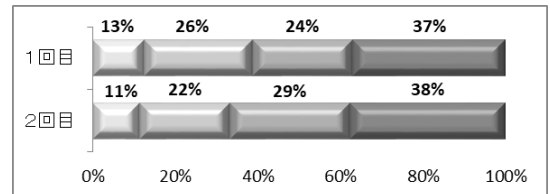
### 3 年生



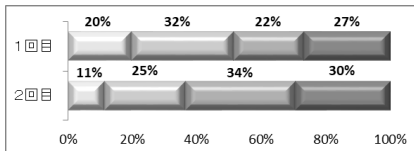
設問6. 気持ちをコントロールするのに困ることが多い（例 人ごみの中にいることが苦手。ついカッとなり感情的になる。など）。

約7割の生徒が気持ちをコントロールすることができている。コミュニケーション力が少しずつ身についてきている（設問2参照）ことや、自己理解が深まったことによる結果と考える。

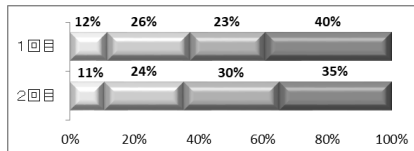
### 全 生 徒



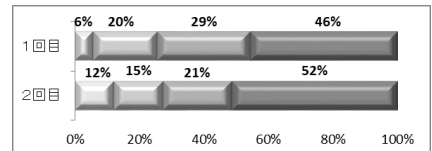
### 1 年生



### 2 年生



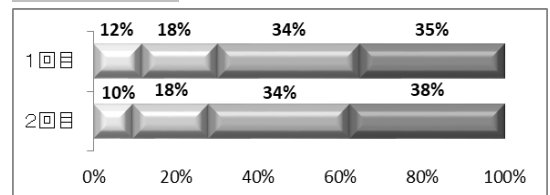
### 3 年生



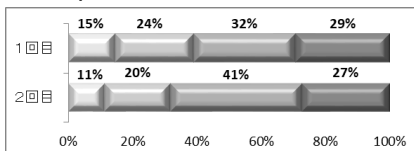
設問7. 複雑なことを理解するのに困ることが多い（例 一度に二つ以上のことを言われると分からなくなる。野球・サッカー、集団ゲームなどのルールを理解することが苦手。など）。

全体では約3割の生徒が複雑なことを理解することに対して困りを感じている。

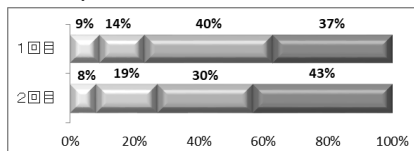
### 全 生 徒



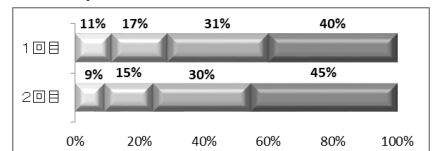
### 1 年生



### 2 年生



### 3 年生

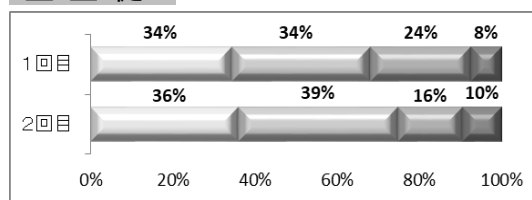




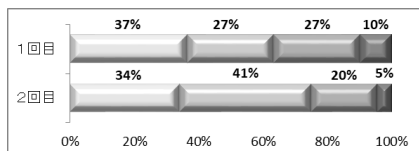
設問8. 落ち着いて受けることができる授業が多い。

7割以上の生徒が落ち着いて授業を受けることができている。どの学年も徐々に落ち着いて授業が受けられる生徒が増えている。

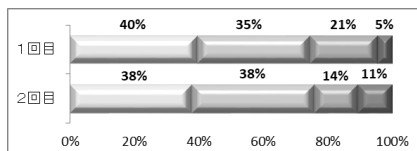
全生徒



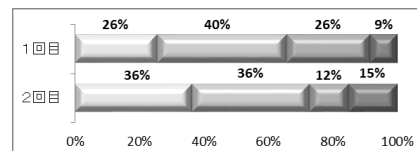
1年生



2年生



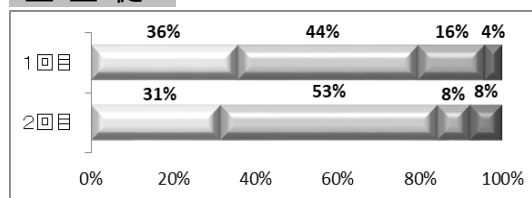
3年生



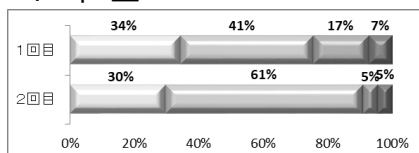
設問9. わからないことがあると、ていねいに対応してもらえる授業が多い。

約8割の生徒がていねいに対応してもらっていると感じている。特に1年生で、そう感じる生徒が増えているのは、少人数制講座やチームティーチング、総合育成支援員の複数配置などによる結果と考えられる。

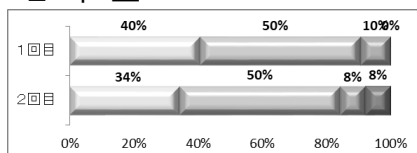
全生徒



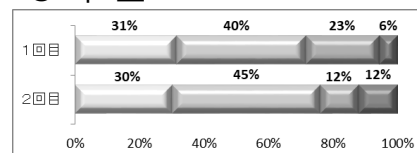
1年生



2年生



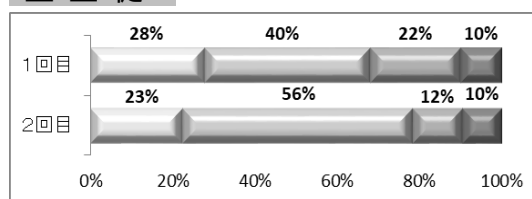
3年生



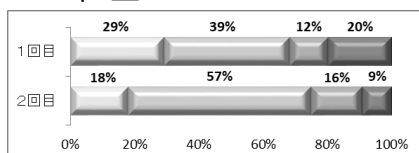
設問10. 授業に興味を持てたり理解しやすくするための工夫（プロジェクタやタブレットの使用など）がされている授業が多い。

7割以上の生徒が工夫された授業が多いと感じており、その数は更に増えている。iPad、プロジェクタや電子黒板などを使用した視覚優位な授業が多く行われている結果と考える。

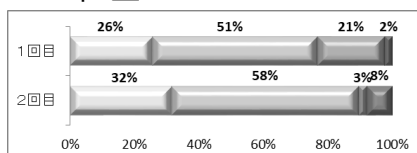
全生徒



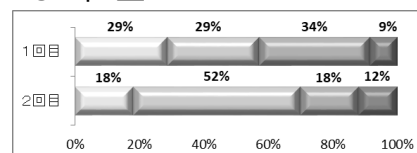
1年生



2年生



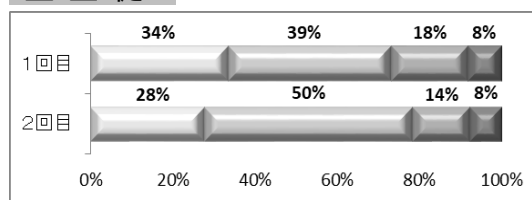
3年生



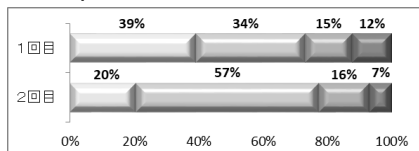
設問 11. プロジェクタやタブレットの使用が授業の理解に役立っている。

全体では7割以上の生徒は視覚優位の授業が理解に役立っていると考えている。特に2年生でその意識が顕著に表れている。

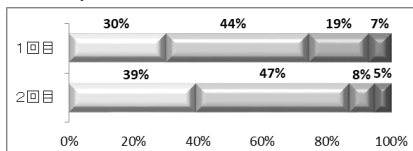
全生徒



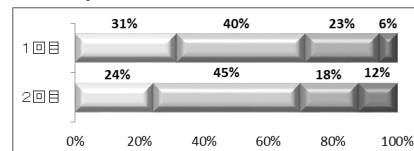
1年生



2年生



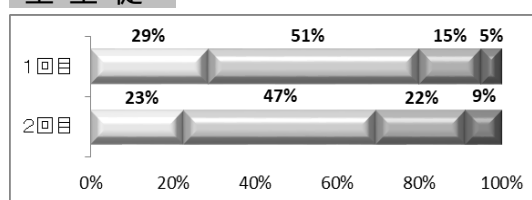
3年生



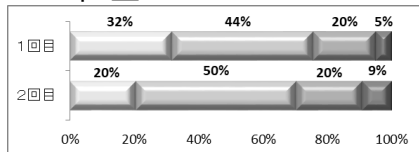
設問 12. 授業の内容を理解している。

全体では7割の生徒が授業の内容を理解している。授業でのさまざまな工夫や支援の結果であると考え。ただし、授業が進んでの2回目のアンケートで、理解できていないと感じている生徒が増えていることには対策が必要である。

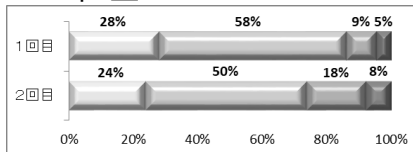
全生徒



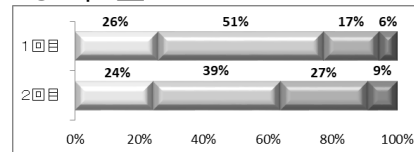
1年生



2年生



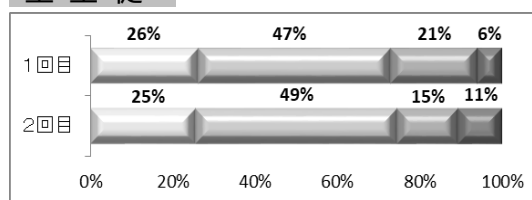
3年生



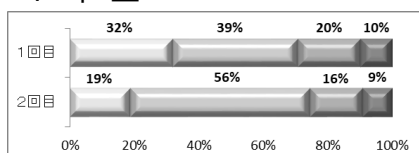
設問 13. 授業に満足している。

全体では7割以上の生徒が授業に満足している。ただし、1年生だけ強い肯定感を持つ生徒が減少している。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。

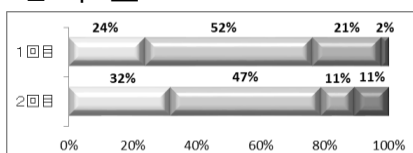
全生徒



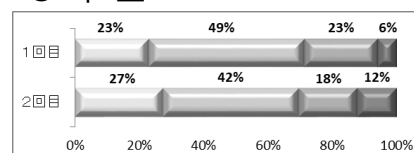
1年生



2年生



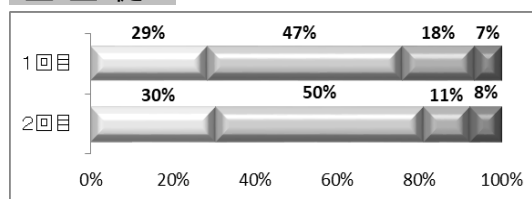
3年生



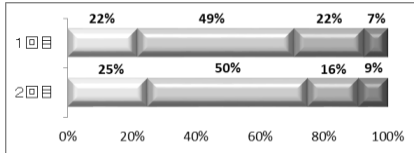
設問 14. 成績のつけ方がわかりやすい。

8割以上の生徒が成績のつけ方を理解し、納得している。ただし、1年生に関しては、理解出来ない生徒が2割以上いることには対策が必要である。

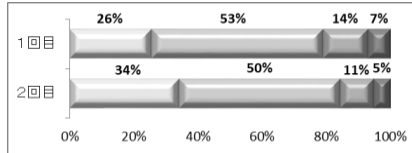
全生徒



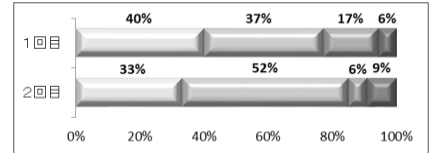
### 1 年生



### 2 年生



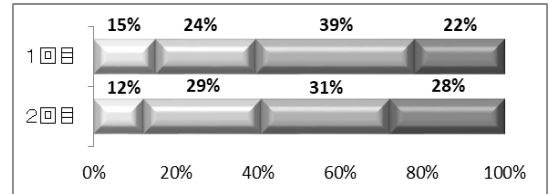
### 3 年生



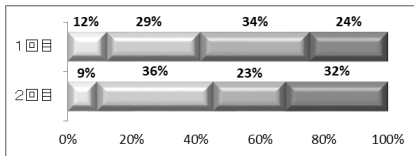
設問 15. 自分から積極的に勉強するようになった。

全体では肯定意見が微増している。しかし、半数以上の生徒は積極的に勉強に取り組むことができていない。そのような生徒に対し、原因を追究し、さらなる指導を行う必要がある。

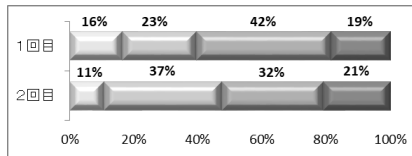
### 全 生 徒



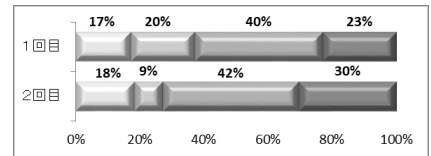
### 1 年生



### 2 年生



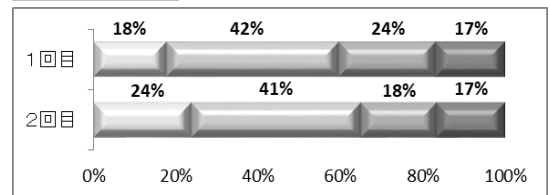
### 3 年生



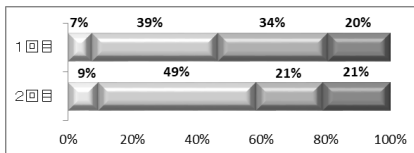
設問 16. 先生やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

全体では約6割の生徒が相談しやすい関係を築けているが、4割以上の1年生や3年生から肯定感を得られていない原因を精査する必要がある。

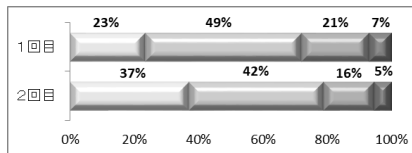
### 全 生 徒



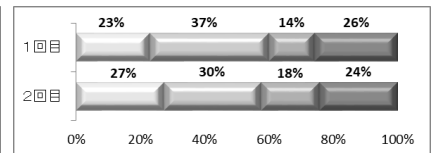
### 1 年生



### 2 年生



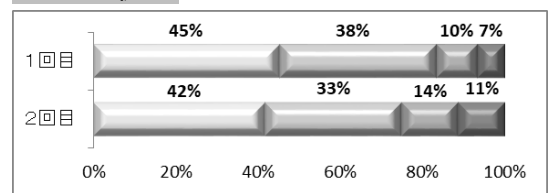
### 3 年生



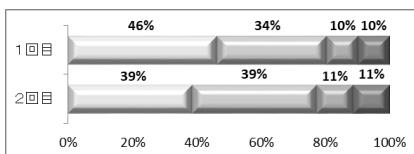
設問 17. 友人関係がうまくいっている。

全体として7割以上の生徒が良好な友人関係が築けている。2回目のアンケート時には友人関係が複雑化し、うまくいってないと感じる生徒が微増していることには適切な支援が必要である。

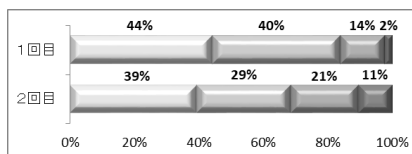
### 全 生 徒



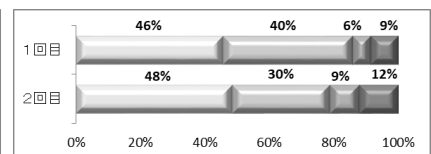
### 1 年生



### 2 年生



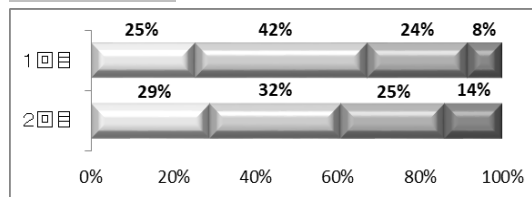
### 3 年生



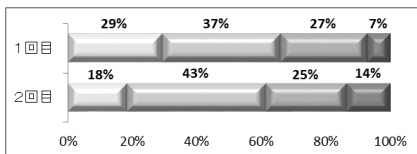
設問 18. 目標を持って学校生活を送っている。

強い肯定意見が2年生や3年生では増加しているのに対し、1年生では減少している。全体としては肯定意見が減少しており、将来展望を開くような、日常の指導が必要であると考える。

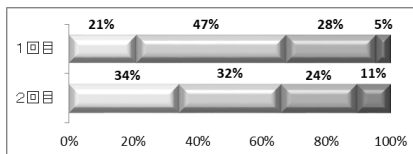
全 生 徒



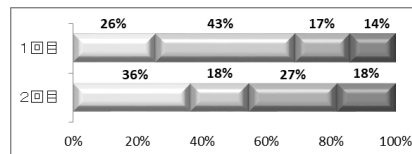
1 年 生



2 年 生



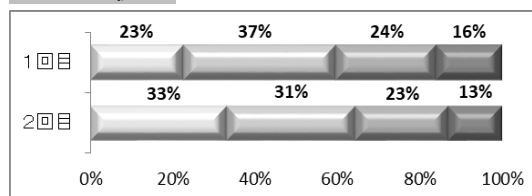
3 年 生



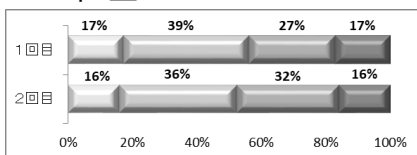
設問 19. 卒業後の進路について考えられる。

肯定意見が2年生や3年生では増加しているのに対し、1年生では変化が見られない。卒業後の進路について早い時期から考えさせるために、より丁寧な指導が必要であると考える。

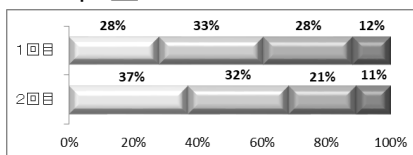
全 生 徒



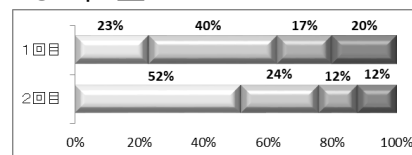
1 年 生



2 年 生



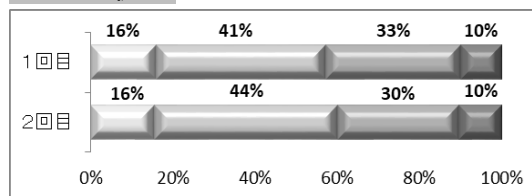
3 年 生



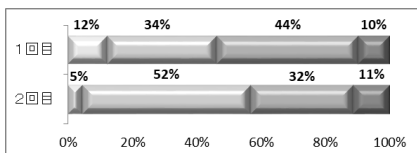
設問 20. 学校生活をとおして、問題を解決する能力がついた。

1年生や2年生では、肯定意見が増加している。精神的に成長した結果がうかがえる。しかし、3年生は進路での不安からか、また全体でも4割程度の生徒がまだ十分な能力が身についたと思っていない。

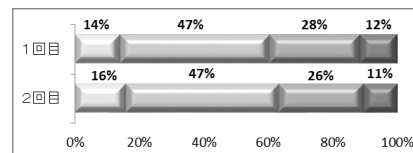
全 生 徒



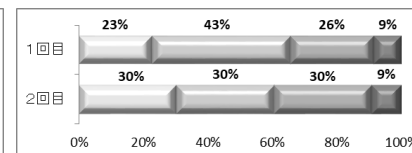
1 年 生



2 年 生



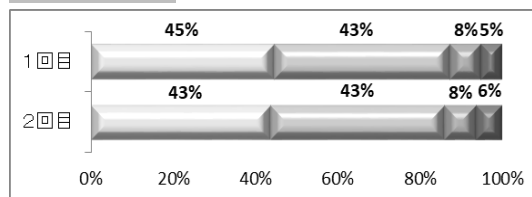
3 年 生



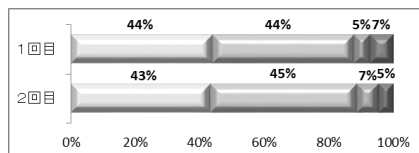
設問 21. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

8割以上の生徒がルールやマナーを守って学校生活を送ることができている。そのことに肯定感を持っていない一部の限られた生徒に対し、丁寧な日常生活指導が必要であると考え

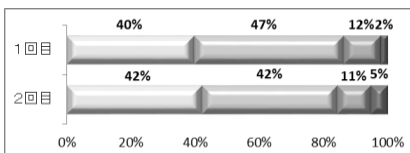
全 生 徒



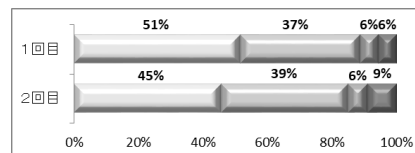
## 1 年 生



## 2 年 生



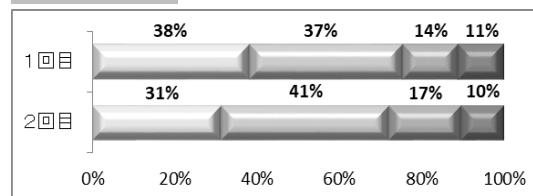
## 3 年 生



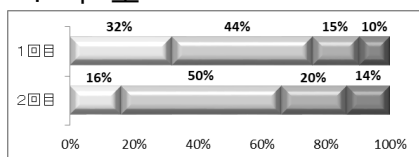
設問 22. 自分のことを大切にできている。

全体として肯定意見が約7割に減少している。特に1年生の強い肯定意見の減少が目立つ。生徒が自分自身を大切にして、自己肯定感の向上を促す適切な支援が必要である。

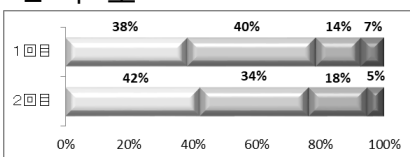
## 全 生 徒



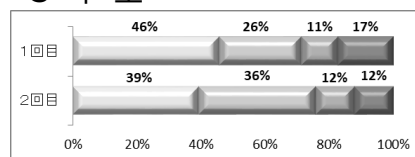
## 1 年 生



## 2 年 生



## 3 年 生



### ■ 生徒全体を通しての考察

- \* グラフには直接反映されていないが、設問1～設問7に対して1つでも「強くそう思う」または「そう思う」という回答をしている生徒は何らかの「困り」を感じていると考えられる。そのような生徒が7割に達しているのが本校の現状である。この現状を踏まえ、今後も指導方法等を研究し支援を継続・改善していく必要がある。
- \* 1回目119名の回答で「困り」を感じている生徒が88名（73.9%）、感じていない生徒31名（26.1%）。  
2回目115名の回答で「困り」を感じている生徒が86名（74.8%）、感じていない生徒29名（25.2%）。  
一見、「困り」を感じている生徒の割合が増えているようにも見て取れるが、「困り」を感じている生徒がその「困り」を解消できないまま、退学もしくは休学に至っている。実際「困り」を感じていない生徒の実数も増えていない。
- \* 「書くこと」や「聞くこと」に対して困りを感じている生徒は増加している。こういった生徒の困りに対応できるよう、さらなる丁寧な指導が求められる。
- \* 半数以上の生徒が積極的に勉強できていないとの回答をしていることは今後の課題であると言える。
- \* 学校生活を通して、自己肯定感の向上に関しては、2年生76%（昨年度1年次78%）・3年生75%（昨年度2年次74%）と変化が見られない。このことから、自分自身に達成できる自信が持てないため、目標を定められない傾向にあると考える。

### iii) 保護者対象

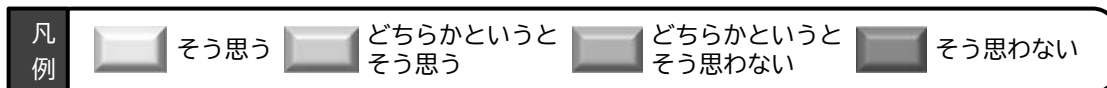
対象：定時制生徒保護者 133名

実施日：第1回 令和元年7月

第2回 令和元年12月

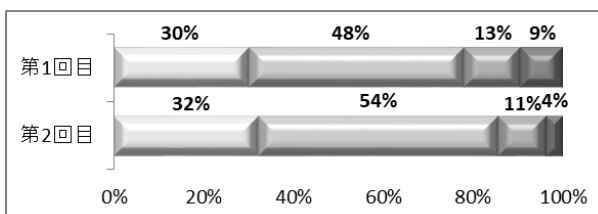
回収数：第1回96名

第2回28名



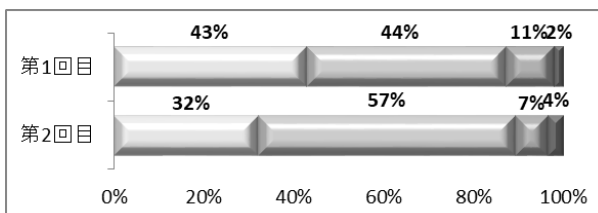
#### 設問1. 授業に意欲的に取り組んでいる。

肯定意見が増えている。生徒が学校生活に慣れてきたこともあり、授業に対しても興味や関心が向いてきたと感じる保護者が増えたのではないかと考える。



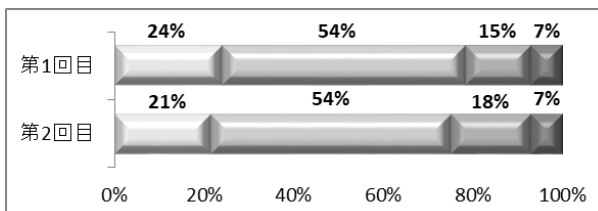
#### 設問2. 教員は、お子様を理解し指導をしている。

9割程度の保護者が、教員は生徒を理解し、指導をしていると捉えている。



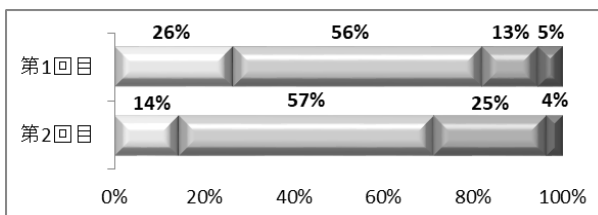
#### 設問3. 授業の内容を理解している。

授業が進むにつれ、内容が難解になっていく中で、保護者は生徒から聞く授業の様子や成績から判断する為、肯定意見が減少していると考えます。



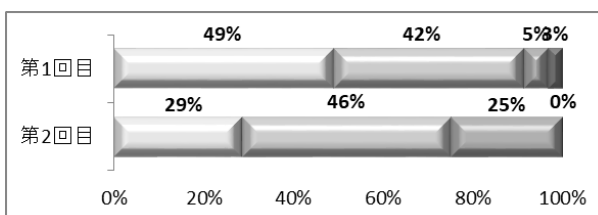
#### 設問4. 授業に満足している。

生徒が授業に満足していないと感じている保護者が、2割から3割に増えている。このことから、さらなる丁寧な指導が求められていると考えます。



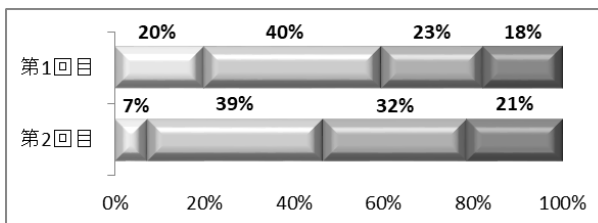
#### 設問5. 教員は、お子様に成績のつけ方をわかりやすく説明できている。

多くの保護者が成績のつけ方を理解し、納得している。担任が三者面談等で保護者にもわかりやすく説明している結果ではないかと考える。このことから、学期ごとに行っている学年連絡会議で情報を共有することは有効である。



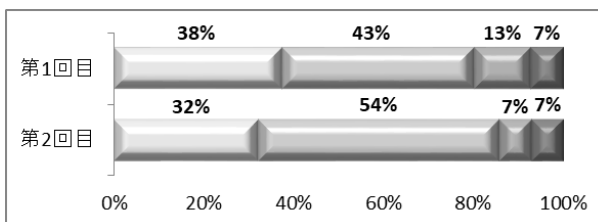
設問6. 積極的に勉強することができる。

半数以上の保護者は生徒が積極的に勉強していると捉えていた。しかし、学校生活の慣れから、取り組む意欲をなくしていると感じる保護者が増えている。さらなる家庭学習等の指導が必要であると考え。



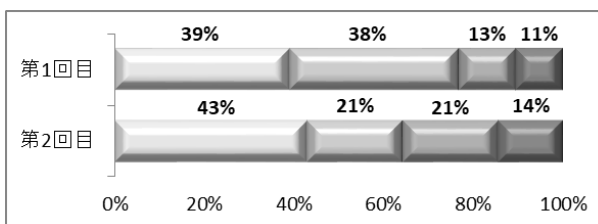
設問7. 教員やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

8割以上の保護者が教員やスクールカウンセラーに相談をしやすいと感じている。ひとりひとりに寄り添って、親身に相談に乗ることができていることがうかがえる。



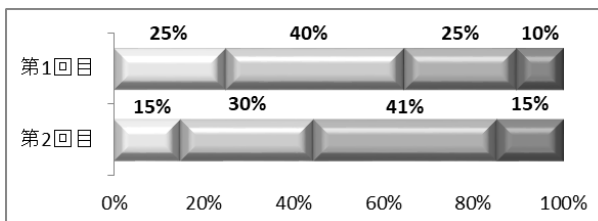
設問8. 友人関係がうまくいっている。

生徒同士の友人関係がうまくいっていると感じている保護者が6割に減っている。保護者は生徒から聞く様子で判断していると思われるため、生徒に学校生活の中で友人関係の支援が必要であると考え。



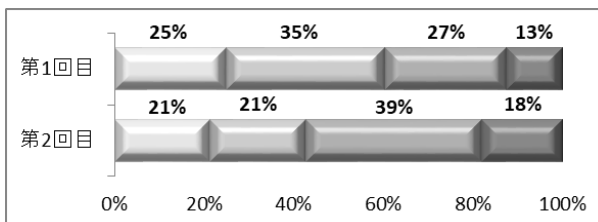
設問9. 日々、目標を持って学校生活を送っている。

6割以上の保護者は、生徒が目標を持って学校生活を送っていると感じていた。第2回目で否定意見が大きく増えており、生徒の将来展望を開くような、さらなる日常の指導と進路指導が必要であると考え。



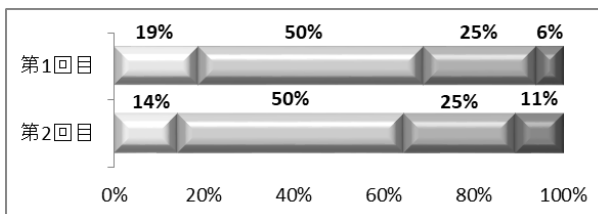
設問10. 卒業後の進路について考えることができる。

前問と同じことがうかがえる。また、生徒だけでなく保護者に対しても、卒業後の進路についての情報提供をさらにわかりやすく伝える必要があるのではないかと考える。



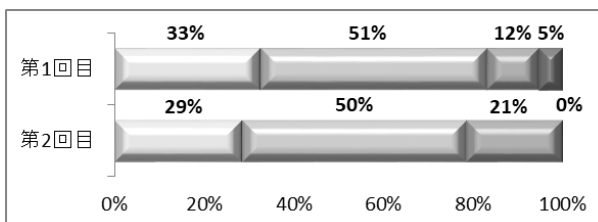
### 設問 11. 学校生活を通して、問題を解決する能力がついている。

生徒が学校生活を通して問題を解決する能力が身についたと感じる保護者は減っている。多岐にわたる身の回りの様々な問題に対して、生徒が対応していく力を、学校での指導に期待されている表れであると思われる。



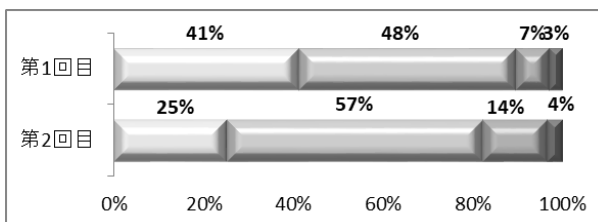
### 設問 12. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

約8割の保護者が、生徒はルールやマナーを守って学校生活を送っていると感じている。



### 設問 13. 子どもに合った支援を受けられていると感じる。

8割以上の保護者が、それぞれの生徒に合った支援を受けられていると感じている。教員が生徒に対して行っている支援が、保護者にも適切に伝わっていることがうかがえる。



## ■ 保護者全体を通しての考察

- \* 保護者対象のアンケートの回収率は、第1回目は昨年度45%程度を本年度72%に上げたが、第2回目は昨年度40%程度に対して本年度21%でしかなかった。次回アンケートまでに、第2回目の回収率を上げる方法を検討する必要がある。
- \* 授業の内容が難しくなるにつれ、生徒の理解度や満足度が下がると捉える保護者は多い。難しい内容に対してさらなる丁寧な指導が必要である。
- \* 半数近くの保護者が、生徒が積極的に勉強に取り組めていないと感じている。そのように感じるのは、家庭学習での取り組み方で判断することが多いと考える。このことから、家庭学習への指導方法に工夫が必要である。
- \* 生徒の卒業後の進路について、学校での取り組み等が保護者に伝わっていないように感じる。保護者にも情報を提供できるようにする。
- \* 多くの項目において、概ね肯定意見は多いが昨年度より学校に対する期待感が大きく、数的に厳しい評価と考えねばならないと思われる。

## 3. 調査研究の到達点

調査研究の到達目標として、設定した3点について本年度の到達点は以下のとおりである。



### 目標1 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

個々の生徒が学習に臨む態勢を整えることができるように、そのニーズに応じて教員が適切に支援できる校内システムの構築に取り組み、教職員とSCやSSW等の専門職とが一体となって、それぞれの専門性を活かした効果的かつ効率的な連携のあり方を策定し実践してきた。

本年度はその実践を通して得られた支援のあり方を、より良い形へ改善していくことを試みた。

に対しては、

生徒が学習に臨む態勢を整える外的支援体制として、「支援コーディネーター」が一定の役割を果たしながら、担任をはじめとする直接生徒を指導する教職員と直接・間接の関わりを持つSCやSSWという専門職とが協力しながら個別のケースに対応していく体制は充実してきた。そのために必要な情報の収集と管理、活用も一定の体制は整ってきた。

一方、学習態勢を整えるための個々の生徒の内的支援として、SSTの取組も形が整い、その成果も表れてきた。特に本年度は、新たに通級による自立活動の指導を1年生から始めたり、2年生の取組を新規に加わった専門職であるSCCの協力を得ながら大幅に改善したりしたことによる効果が表れつつある。今後の継続的な取組によるより大きな効果への期待も持てるところである。

### 目標2 学習指導方法と評価方法の確立

生徒個々のニーズに応える学習指導法の開発にあたり、「発達障がいがある生徒を対象とした特性を踏まえた学習指導法」「小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった生徒を対象とした未学習内容を補充しながらの学習指導法」について事例を蓄積し分析する。また、本年度は「日本語以外を母国語とする生徒を対象とした学習指導法」についても分析する。

学習目標の達成度合いを評価する評価法については、個々に応じた学習指導法に適応しながら他の生徒の評価との整合性を持たせた評価法を策定する。

に対しては、

「授業のチェックシート」は運用率がまだまだ低いため、項目数を減らすことや見やすいものにするなど、より教員が運用しやすいものに改善する。また、「自己目標マップ」については、結果の分析を今後、検討していく。評価方法の確立については、来年度から実施、分析を行っていく。

### 目標3 支援を支える教職員の知識・理解の深化

合計9回の研修会を開催した。日々の実践等の経験もあり、教職員の知識や理解は深まっていると考えられる。また、生徒についての意見交流会等の取組により生徒支援への認識の変革も一層進んできた。また、調査研究の内容を報告・共有する場としての機能も果たした。研修会の際のアンケート記述により、教職員の理解の深まりや意識の向上が伺えると共に意見をj得る機会にもなった。これらの意見は今後の課題として活かしていく。

本研究のさらなる向上を目指して、引き続き校内での研修会の実施や、先進的な取組をしている他校の視察を計画する。

に対しては、

研修会を重ね日々の実践や経験を加味すると教職員の知識や理解は深まっており、生徒についての見方も変化してきたと考える。更に意欲を持って取り組もうとする教職員も増えてきている。研修に課題意識を持って臨む者もあり、今後の取組の目標につなげることができるとよい。また、専門家の役割の明確化や教職員とのよりよい協働のための情報共有の機会としても活用できるとよい。実践力向上のためのキーワードとして挙げた以下の3点についても意図的に実践につなげたい。

○情報発信・情報共有（可視化）

○生徒の個別の聞き取り（対話）

○ケース会議の充実（協働）

他校の視察からは、今後とも先進的な取り組みを参考にできるようにしたい。

## IV 来年度の課題

調査研究の最終年度となる来年度は目標の最終的な実現、完結を目指して以下のような課題の解決を目指す。

### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

学習態勢の確立には、多様な学習のニーズに応じて学習指導を行うための校内体制を整えるため下記(a)～(d)の内容について検討を進め、整備・構築が進んできた体制の完成を図る。

#### (a) 支援体制のシステム化

特定の力量を持った教職員の存在が様々な「困り」を抱えた生徒一人ひとりに対する支援を可能としたり、確かな学力を保障する学習指導ができたりするのではなく、教職員集団が変化してもこれらが可能となるような校内体制の実現を目指すため、個別の事例を重ねた経験をもとにした活動内容等を文字化して次期担当者に伝達できるような「システム化」や「マニュアル化」について、重点的に実現を目指す。

#### (b) 生徒情報の機能的・効率的な取り扱い

普段の会話の中で出て、その場で消えてしまうような教職員の気づきといった情報の記録を効果的に進めるためのシステムの改善を目指す。

#### (c) 生徒支援プランの評価

生徒の学習態勢を整えるために実行したプランの評価（すなわちプランニングが適切に行っていたか否か）は、そのプランの適否を評価して次のアセスメントとプランニングに繋げるサイクルの構築にとって重要と考え、そのシステム化を目指す。

#### (d) SSTの強化

SSTに関しては、引き続き内容の掘り下げなどの改善や充実の方策を検討する余地があると考え、その改善を目指す。

### (2) 学習指導方法と評価方法の確立

個別対応の側面が有り統一したものが作り難いところもあるが、下記(e)～(g)の内容について検討を進め、ある程度の方法の確立を図る。

#### (e) 学習指導方法の改善

学習指導方法の改善に関する研究には引き続き取り組むが、本年度使用した「授業のチェックシート」の運用が不十分であると感じられた。原因として、リストの項目数が多かったことなどが挙げられ、項目の精選等に取り組む。

(f) 学習指導方法の規準作り

学習指導方法に関して、個別の「困り」の内容に対応してカスタマイズができるような規準となるもの（雛形）の策定を目指す。

(g) 評価方法の確立

生徒によっては指導方法を工夫・改善しても学習内容の定着が見られないなど、単位の認定に支障がある場合がある。その要因には高等学校の学習を積み上げることが困難である（発達遅滞等）ことも考えられる状況であるが、入学を認めた生徒である以上、何らかの評価方法を用いることで単位認定につなげるべきであろう。

来年度は、新しい視点を取り入れたルーブリック等を作成することによって評価方法の改善を目指す。

## 学習状況のチェック表

教科担当 \_\_\_\_\_ 先生 \_\_\_\_\_

下記の ①～⑪ それぞれについて、該当する数字を記入してください。

1：できていない 2：どちらともいえない 3：できている

	1 年									
	組	番	組	番	組	番	組	番	組	番
	名前		名前		名前		名前		名前	
① 板書された内容をノートやプリントに書きとることができる。										
② 教員の話や指示をしっかりと聞いている。										
③ 提出物をきちんと出すことができる。										
④ 同じ質問を繰り返したり、何度も聞き返したりせず、聞くことができる。										
⑤ 1つのことにこだわっても(興味を持って)、時間の切り替えがうまくできる。										
⑥ 授業等の直前に時間割や学習場所が変更になっても対応できる。										
⑦ 具体的に指示されたことだけでなく、自分で計画を立てることもできる。										
⑧ 整理整頓ができて、物の管理ができる。										
⑨ 準備や片付けに時間をかけず、要領よくできる。										
⑩ 質問の意図に応じた発表(発言)ができる。										
⑪ 自分から質問をしたときに、相手の回答を待ってから次の話題に替えられる。										

## 授業のチェックシート

項目	番号	指導方法の内容	A	B	C
書く	1	プリントを電子黒板やプロジェクター等を使いスクリーンに映して、記入例を示している。			
	2	板書する文字数を少なくしている。パワーポイントを使うなどしている。文字数が多い場合でも写す時間を確保している。			
	3	記入欄に通し番号を振っている。			
	4	プリント フォントなど工夫している。(12ポイント・A3・罫線やマスの大きさ・余白など大きめのものにしてはいる。)			
	5	プリント 授業に必要な基礎知識(教科書の本文や図等)を載せている。			
	6	プリント テストでは、問いの直ぐ近くに回答欄を置くなど、記入場所の間違いがないようにしている。			
	7	ノート ノートの使い方を説明し、手本を示している。			
	8	ノート 前回のノートの書き終わりを確認し、前回欠席の場合などは必要な余白を確認している。			
話す	9	難しい単語・語句にフリガナを振り、発音を表記している。			
	10	発問は、一問一答にするなど、答えやすいものになっているか意識している。			
	11	(英文など)2～3語程度(まとまった意味グループ)ごとに斜線で区切っておいて、読ませている。			
	12	音読をする機会をつくっている。出来る限りで、発話の機会を作っている。			
	13	全体の前で発表をするときには、自分の意見をまとめる用紙に前もって記入させている。			
	14	ジグソー学習やチームでの作戦会議などのグループワーク技法を使っている。活動の役割を明確にしている。			
聞く	15	授業や話の初めに、本時の単元目標など学習の流れを示して、話に見通しを持たせている。			
	16	聞く姿勢を作るために、授業の初めにアイスブレイクを行っている。			
	17	ゆっくり、はっきり、大きな声で聴きとりやすく話している。話し出す前に、全体を話し手に注目させている。			
	18	話を聞く場面と問題を解く(あるいは板書を写す)場面の区別を明確にしている。(23と同じ)			
	19	生徒がイメージを持てるようにICT機器を使って視覚的な手がかりを用意している。作業途中や完成図を見せられている。			
切り替え	20	本日のテーマや目標(や教科書のページや月日など)を、授業の初めに書いている。			
	21	授業開始時に挨拶を行うなどの習慣化した作業を行っている。			
	22	DVD等の視聴覚教材を用いるなど、活動にわかりやすい変化を入れている。			
	23	話を聞く場面と問題を解く(あるいは板書を写す)場面の区別を明確にしている。(18と同じ)			
	24	いま行っている活動の終わりの時間を示している。タイマーを用いて終わりははっきりさせている。			
時間の管理	25	実習や実験で、作業行程表をつくり、行動と時間を細かく具体的にしている。役割分担決めをしている。			
	26	10分など決まった時間で実習や演習をすることを繰り返して、その時間の感覚をつけている。			
	27	宿題は課題の量と形式を工夫し、提出物の期限を決めて伝えている。自分でそれまでの準備を計画させている。			
	28	終わりの段階を示している。(考査の範囲を伝える。本時の目標を伝えている。)片付けも含めて計画させている。			
	29	活動や作業にかかった時間を測り、記入させている。			
物の管理	30	授業プリントにファイリング用の穴をあけている。授業プリントにナンバーを記入してある。			
	31	一人に1つファイルを配布している。片付ける場所があるようにしている。			
	32	ノートに貼るプリントはのりの印をつけ、ノートサイズよりやや小さめに切って配布している。			
	33	大切に扱わないといけな理由を伝えるなど、施設や道具を大切に扱うように注意している。			
	34	教室に籠を準備することや物に番号を振ること、カラーテープをつけることをし、片付け完了を一目瞭然にしている。			
	35	準備状況を確認している。			

A⇒これまでの状況 … ○：意識有 △：知ってはいたが、意識していない ×：意識無し

B⇒これからの取組 … ○：実施→授業準備や授業中に意識してみる  
×：不実施→この授業には適さないで、取り組めない(取り組まない)

C⇒実施項目の結果 … ○：意識していた  
△：期間(2学期中間など)の半分ほどは意識できていなかった  
×：意識できなかった

## 自己目標マップ

科目	C 英語基礎
----	--------

1年	組	番	名前
----	---	---	----

<p>1学期を振り返ってみよう！</p> <p>できるようになったこと</p> <p>反省していること</p>	<p>2学期中間調査までの目標</p> <p>① ひとつひとつの授業を大切に。 ② 教科書の本文の一部を相手に伝えるように正確に音読することができる。 ③ 助動詞・進行形・be動詞や一般動詞の過去形を用いて表現することができる。</p>
<p>2学期中間調査までの自己目標と そのために自分自身ができる行動</p> <p>自己目標：</p> <p>そのためにできる行動</p> <p>①</p> <p>②</p> <p>③</p>	

↓ ↓ 調査まで残りの授業回数	😊	😐	😞	今日の1番の学び
17	日 ( )			
16	日 ( )			
15	日 ( )			
14	日 ( )			
13	日 ( )			
12	日 ( )			
11	日 ( )			
10	日 ( )			
9	日 ( )			
8	日 ( )			
7	日 ( )			
6	日 ( )			
5	日 ( )			
4	日 ( )			
3	日 ( )			
2	日 ( )			
1	日 ( )			
0	日 ( )			2学期中間調査

## 資料4

## 意識調査アンケート結果（教職員対象）

4：そう思う

3：どちらかというと思う

2：どちらかというと思わない

1：そう思わない

設問 1.	4	3	2	1	計
第 1 回	10(32%)	18(58%)	3(10%)	0(0%)	31(100%)
第 2 回	14(45%)	13(42%)	3(10%)	1(3%)	31(100%)

設問 2.	4	3	2	1	計
第 1 回	12(39%)	18(58%)	1(3%)	0(0%)	31(100%)
第 2 回	17(55%)	13(42%)	1(3%)	0(0%)	31(100%)

設問 3.	4	3	2	1	計
第 1 回	4(13%)	19(63%)	7(23%)	0(0%)	30(100%)
第 2 回	5(16%)	19(61%)	6(19%)	1(3%)	31(100%)

設問 4.	4	3	2	1	計
第 1 回	14(48%)	8(28%)	6(21%)	1(3%)	29(100%)
第 2 回	9(31%)	12(41%)	7(24%)	1(3%)	29(100%)

設問 5.	4	3	2	1	計
第 1 回	3(11%)	18(64%)	7(25%)	0(0%)	28(100%)
第 2 回	7(24%)	17(59%)	5(17%)	0(0%)	29(100%)

設問 6.	4	3	2	1	計
第 1 回	9(29%)	11(35%)	8(26%)	3(10%)	31(100%)
第 2 回	6(19%)	17(55%)	5(16%)	3(10%)	31(100%)

設問 7.	4	3	2	1	計
第 1 回	6(19%)	14(45%)	10(32%)	1(3%)	31(100%)
第 2 回	3(10%)	18(58%)	7(23%)	3(10%)	31(100%)

設問 8.	4	3	2	1	計
第 1 回	4(13%)	13(42%)	14(45%)	0(0%)	31(100%)
第 2 回	3(10%)	21(68%)	4(13%)	3(10%)	31(100%)

設問 9.	4	3	2	1	計
第 1 回	10(36%)	13(46%)	4(14%)	1(4%)	28(100%)
第 2 回	9(29%)	17(55%)	3(10%)	2(6%)	31(100%)



設問10.	4	3	2	1	計
第1回	0(0%)	14(47%)	16(53%)	0(0%)	30(100%)
第2回	1(3%)	17(55%)	11(35%)	2(6%)	31(100%)

設問11.	4	3	2	1	計
第1回	10(33%)	19(63%)	1(3%)	0(0%)	30(100%)
第2回	13(42%)	13(42%)	3(10%)	2(6%)	31(100%)

設問12.	4	3	2	1	計
第1回	9(30%)	17(57%)	4(13%)	0(0%)	30(100%)
第2回	12(40%)	18(60%)	0(0%)	0(0%)	30(100%)

設問13.	4	3	2	1	計
第1回	10(33%)	14(47%)	6(20%)	0(0%)	30(100%)
第2回	10(33%)	18(60%)	2(7%)	0(0%)	30(100%)

設問14.	4	3	2	1	計
第1回	3(10%)	18(62%)	8(28%)	0(0%)	29(100%)
第2回	11(37%)	16(53%)	2(7%)	1(3%)	30(100%)

設問15.	4	3	2	1	計
第1回	3(14%)	12(57%)	6(29%)	0(0%)	21(100%)
第2回	3(10%)	16(55%)	9(31%)	1(3%)	29(100%)

設問16.	4	3	2	1	計
第1回	4(14%)	19(66%)	6(21%)	0(0%)	29(100%)
第2回	2(7%)	21(72%)	6(21%)	0(0%)	29(100%)

設問17.	4	3	2	1	計
第1回	6(21%)	14(48%)	9(31%)	0(0%)	29(100%)
第2回	7(24%)	16(55%)	6(21%)	0(0%)	29(100%)

設問18.	4	3	2	1	計
第1回	3(10%)	16(53%)	9(30%)	2(7%)	30(100%)
第2回	0(0%)	22(71%)	8(26%)	1(3%)	31(100%)

設問19.	4	3	2	1	計
第1回	3(10%)	24(80%)	3(10%)	0(0%)	30(100%)
第2回	4(13%)	24(77%)	3(10%)	0(0%)	31(100%)

## 資料4

## 意識調査アンケート結果（生徒対象）

4：そう思う

3：どちらかというと思う

2：どちらかというと思わない

1：そう思わない

設問1.		4	3	2	1	計
全体	第1回	6(5%)	20(17%)	36(30%)	57(48%)	119(100%)
	第2回	10(9%)	12(11%)	35(31%)	57(50%)	114(100%)
1年	第1回	1(2%)	9(22%)	9(22%)	22(54%)	41(100%)
	第2回	3(7%)	9(20%)	13(30%)	19(43%)	44(100%)
2年	第1回	2(5%)	7(16%)	17(40%)	17(40%)	43(100%)
	第2回	3(8%)	1(3%)	15(41%)	18(49%)	37(100%)
3年	第1回	3(9%)	4(11%)	10(29%)	18(51%)	35(100%)
	第2回	4(12%)	2(6%)	7(21%)	20(61%)	33(100%)

設問2.		4	3	2	1	計
全体	第1回	16(13%)	34(29%)	26(22%)	43(36%)	119(100%)
	第2回	15(13%)	32(28%)	27(24%)	40(35%)	114(100%)
1年	第1回	7(17%)	12(29%)	10(24%)	12(29%)	41(100%)
	第2回	5(11%)	16(36%)	11(25%)	12(27%)	44(100%)
2年	第1回	7(16%)	10(23%)	11(26%)	15(35%)	43(100%)
	第2回	3(8%)	12(32%)	10(27%)	12(32%)	37(100%)
3年	第1回	2(6%)	12(34%)	5(14%)	16(46%)	35(100%)
	第2回	7(21%)	4(12%)	6(18%)	16(48%)	33(100%)

設問3.		4	3	2	1	計
全体	第1回	7(6%)	35(29%)	30(25%)	47(39%)	119(100%)
	第2回	8(7%)	21(18%)	38(33%)	47(41%)	114(100%)
1年	第1回	3(7%)	12(29%)	10(24%)	16(39%)	41(100%)
	第2回	1(2%)	9(20%)	16(36%)	18(41%)	44(100%)
2年	第1回	3(7%)	11(26%)	14(33%)	15(35%)	43(100%)
	第2回	2(5%)	8(22%)	13(35%)	14(38%)	37(100%)
3年	第1回	1(3%)	12(34%)	6(17%)	16(46%)	35(100%)
	第2回	5(15%)	4(12%)	9(27%)	15(45%)	33(100%)

設問4.		4	3	2	1	計
全体	第1回	9(8%)	15(13%)	41(34%)	54(45%)	119(100%)
	第2回	9(8%)	22(19%)	31(27%)	52(46%)	114(100%)
1年	第1回	2(5%)	4(10%)	13(32%)	22(54%)	41(100%)
	第2回	4(9%)	6(14%)	14(32%)	20(45%)	44(100%)
2年	第1回	4(9%)	5(12%)	16(37%)	18(42%)	43(100%)
	第2回	3(8%)	10(27%)	8(22%)	16(43%)	37(100%)
3年	第1回	3(9%)	6(17%)	12(34%)	14(40%)	35(100%)
	第2回	2(6%)	6(18%)	9(27%)	16(48%)	33(100%)

設問5.		4	3	2	1	計
全体	第1回	12(10%)	19(16%)	37(31%)	51(43%)	119(100%)
	第2回	12(11%)	19(17%)	33(29%)	50(44%)	114(100%)
1年	第1回	4(10%)	5(12%)	14(34%)	18(44%)	41(100%)
	第2回	5(11%)	6(14%)	17(39%)	16(36%)	44(100%)
2年	第1回	3(7%)	7(16%)	15(35%)	18(42%)	43(100%)
	第2回	2(5%)	8(22%)	9(24%)	18(49%)	37(100%)
3年	第1回	5(14%)	7(20%)	8(23%)	15(43%)	35(100%)
	第2回	5(15%)	5(15%)	7(21%)	16(48%)	33(100%)

設問6.		4	3	2	1	計
全体	第1回	15(13%)	31(26%)	29(24%)	44(37%)	119(100%)
	第2回	13(11%)	25(22%)	33(29%)	43(38%)	114(100%)
1年	第1回	8(20%)	13(32%)	9(22%)	11(27%)	41(100%)
	第2回	5(11%)	11(25%)	15(34%)	13(30%)	44(100%)
2年	第1回	5(12%)	11(26%)	10(23%)	17(40%)	43(100%)
	第2回	4(11%)	9(24%)	11(30%)	13(35%)	37(100%)
3年	第1回	2(6%)	7(20%)	10(29%)	16(46%)	35(100%)
	第2回	4(12%)	5(15%)	7(21%)	17(52%)	33(100%)

設問7.		4	3	2	1	計
全体	第1回	14(12%)	22(18%)	41(34%)	42(35%)	119(100%)
	第2回	11(10%)	21(18%)	39(34%)	43(38%)	114(100%)
1年	第1回	6(15%)	10(24%)	13(32%)	12(29%)	41(100%)
	第2回	5(11%)	9(20%)	18(41%)	12(27%)	44(100%)
2年	第1回	4(9%)	6(14%)	17(40%)	16(37%)	43(100%)
	第2回	3(8%)	7(19%)	11(30%)	16(43%)	37(100%)
3年	第1回	4(11%)	6(17%)	11(31%)	14(40%)	35(100%)
	第2回	3(9%)	5(15%)	10(30%)	15(45%)	33(100%)

設問8.		4	3	2	1	計
全体	第1回	41(34%)	40(34%)	29(24%)	9(8%)	119(100%)
	第2回	41(36%)	44(39%)	18(16%)	11(10%)	114(100%)
1年	第1回	15(37%)	11(27%)	11(27%)	4(10%)	41(100%)
	第2回	15(34%)	18(41%)	9(20%)	2(5%)	44(100%)
2年	第1回	17(40%)	15(35%)	9(21%)	2(5%)	43(100%)
	第2回	14(38%)	14(38%)	5(14%)	4(11%)	37(100%)
3年	第1回	9(26%)	14(40%)	9(26%)	3(9%)	35(100%)
	第2回	12(36%)	12(36%)	4(12%)	5(15%)	33(100%)

## 資料4

設問9.		4	3	2	1	計
全体	第1回	42(36%)	52(44%)	19(16%)	5(4%)	118(100%)
	第2回	36(31%)	61(53%)	9(8%)	9(8%)	115(100%)
1年	第1回	14(34%)	17(41%)	7(17%)	3(7%)	41(100%)
	第2回	13(30%)	27(61%)	2(5%)	2(5%)	44(100%)
2年	第1回	17(40%)	21(50%)	4(10%)	0(0%)	42(100%)
	第2回	13(34%)	19(50%)	3(8%)	3(8%)	38(100%)
3年	第1回	11(31%)	14(40%)	8(23%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	10(30%)	15(45%)	4(12%)	4(12%)	33(100%)

設問10.		4	3	2	1	計
全体	第1回	33(28%)	48(40%)	26(22%)	12(10%)	119(100%)
	第2回	26(23%)	64(56%)	14(12%)	11(10%)	115(100%)
1年	第1回	12(29%)	16(39%)	5(12%)	8(20%)	41(100%)
	第2回	8(18%)	25(57%)	7(16%)	4(9%)	44(100%)
2年	第1回	11(26%)	22(51%)	9(21%)	1(2%)	43(100%)
	第2回	12(32%)	22(58%)	1(3%)	3(8%)	38(100%)
3年	第1回	10(29%)	10(29%)	12(34%)	3(9%)	35(100%)
	第2回	6(18%)	17(52%)	6(18%)	4(12%)	33(100%)

設問11.		4	3	2	1	計
全体	第1回	40(34%)	47(39%)	22(18%)	10(8%)	119(100%)
	第2回	32(28%)	58(50%)	16(14%)	9(8%)	115(100%)
1年	第1回	16(39%)	14(34%)	6(15%)	5(12%)	41(100%)
	第2回	9(20%)	25(57%)	7(16%)	3(7%)	44(100%)
2年	第1回	13(30%)	19(44%)	8(19%)	3(7%)	43(100%)
	第2回	15(39%)	18(47%)	3(8%)	2(5%)	38(100%)
3年	第1回	11(31%)	14(40%)	8(23%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	8(24%)	15(45%)	6(18%)	4(12%)	33(100%)

設問12.		4	3	2	1	計
全体	第1回	34(29%)	61(51%)	18(15%)	6(5%)	119(100%)
	第2回	26(23%)	54(47%)	25(22%)	10(9%)	115(100%)
1年	第1回	13(32%)	18(44%)	8(20%)	2(5%)	41(100%)
	第2回	9(20%)	22(50%)	9(20%)	4(9%)	44(100%)
2年	第1回	12(28%)	25(58%)	4(9%)	2(5%)	43(100%)
	第2回	9(24%)	19(50%)	7(18%)	3(8%)	38(100%)
3年	第1回	9(26%)	18(51%)	6(17%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	8(24%)	13(39%)	9(27%)	3(9%)	33(100%)

設問13.		4	3	2	1	計
全体	第1回	31(26%)	55(47%)	25(21%)	7(6%)	118(100%)
	第2回	29(25%)	56(49%)	17(15%)	12(11%)	114(100%)
1年	第1回	13(32%)	16(39%)	8(20%)	4(10%)	41(100%)
	第2回	8(19%)	24(56%)	7(16%)	4(9%)	43(100%)
2年	第1回	10(24%)	22(52%)	9(21%)	1(2%)	42(100%)
	第2回	12(32%)	18(47%)	4(11%)	4(11%)	38(100%)
3年	第1回	8(23%)	17(49%)	8(23%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	9(27%)	14(42%)	6(18%)	4(12%)	33(100%)

設問14.		4	3	2	1	計
全体	第1回	34(29%)	56(47%)	21(18%)	8(7%)	119(100%)
	第2回	35(30%)	58(50%)	13(11%)	9(8%)	115(100%)
1年	第1回	9(22%)	20(49%)	9(22%)	3(7%)	41(100%)
	第2回	11(25%)	22(50%)	7(16%)	4(9%)	44(100%)
2年	第1回	11(26%)	23(53%)	6(14%)	3(7%)	43(100%)
	第2回	13(34%)	19(50%)	4(11%)	2(5%)	38(100%)
3年	第1回	14(40%)	13(37%)	6(17%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	11(33%)	17(52%)	2(6%)	3(9%)	33(100%)

設問15.		4	3	2	1	計
全体	第1回	18(15%)	29(24%)	46(39%)	26(22%)	119(100%)
	第2回	14(12%)	33(29%)	36(31%)	32(28%)	115(100%)
1年	第1回	5(12%)	12(29%)	14(34%)	10(24%)	41(100%)
	第2回	4(9%)	16(36%)	10(23%)	14(32%)	44(100%)
2年	第1回	7(16%)	10(23%)	18(42%)	8(19%)	43(100%)
	第2回	4(11%)	14(37%)	12(32%)	8(21%)	38(100%)
3年	第1回	6(17%)	7(20%)	14(40%)	8(23%)	35(100%)
	第2回	6(18%)	3(9%)	14(42%)	10(30%)	33(100%)

設問16.		4	3	2	1	計
全体	第1回	21(18%)	50(42%)	28(24%)	20(17%)	119(100%)
	第2回	27(24%)	47(41%)	21(18%)	19(17%)	114(100%)
1年	第1回	3(7%)	16(39%)	14(34%)	8(20%)	41(100%)
	第2回	4(9%)	21(49%)	9(21%)	9(21%)	43(100%)
2年	第1回	10(23%)	21(49%)	9(21%)	3(7%)	43(100%)
	第2回	14(37%)	16(42%)	6(16%)	2(5%)	38(100%)
3年	第1回	8(23%)	13(37%)	5(14%)	9(26%)	35(100%)
	第2回	9(27%)	10(30%)	6(18%)	8(24%)	33(100%)

## 資料4

設問17.		4	3	2	1	計
全体	第1回	54(45%)	45(38%)	12(10%)	8(7%)	119(100%)
	第2回	48(42%)	38(33%)	16(14%)	13(11%)	115(100%)
1年	第1回	19(46%)	14(34%)	4(10%)	4(10%)	41(100%)
	第2回	17(39%)	17(39%)	5(11%)	5(11%)	44(100%)
2年	第1回	19(44%)	17(40%)	6(14%)	1(2%)	43(100%)
	第2回	15(39%)	11(29%)	8(21%)	4(11%)	38(100%)
3年	第1回	16(46%)	14(40%)	2(6%)	3(9%)	35(100%)
	第2回	16(48%)	10(30%)	3(9%)	4(12%)	33(100%)

設問18.		4	3	2	1	計
全体	第1回	30(25%)	50(42%)	29(24%)	10(8%)	119(100%)
	第2回	33(29%)	37(32%)	29(25%)	16(14%)	115(100%)
1年	第1回	12(29%)	15(37%)	11(27%)	3(7%)	41(100%)
	第2回	8(18%)	19(43%)	11(25%)	6(14%)	44(100%)
2年	第1回	9(21%)	20(47%)	12(28%)	2(5%)	43(100%)
	第2回	13(34%)	12(32%)	9(24%)	4(11%)	38(100%)
3年	第1回	9(26%)	15(43%)	6(17%)	5(14%)	35(100%)
	第2回	12(36%)	6(18%)	9(27%)	6(18%)	33(100%)

設問19.		4	3	2	1	計
全体	第1回	27(23%)	44(37%)	29(24%)	19(16%)	119(100%)
	第2回	38(33%)	36(31%)	26(23%)	15(13%)	115(100%)
1年	第1回	7(17%)	16(39%)	11(27%)	7(17%)	41(100%)
	第2回	7(16%)	16(36%)	14(32%)	7(16%)	44(100%)
2年	第1回	12(28%)	14(33%)	12(28%)	5(12%)	43(100%)
	第2回	14(37%)	12(32%)	8(21%)	4(11%)	38(100%)
3年	第1回	8(23%)	14(40%)	6(17%)	7(20%)	35(100%)
	第2回	17(52%)	8(24%)	4(12%)	4(12%)	33(100%)

設問20.		4	3	2	1	計
全体	第1回	19(16%)	49(41%)	39(33%)	12(10%)	119(100%)
	第2回	18(16%)	51(44%)	34(30%)	12(10%)	115(100%)
1年	第1回	5(12%)	14(34%)	18(44%)	4(10%)	41(100%)
	第2回	2(5%)	23(52%)	14(32%)	5(11%)	44(100%)
2年	第1回	6(14%)	20(47%)	12(28%)	5(12%)	43(100%)
	第2回	6(16%)	18(47%)	10(26%)	4(11%)	38(100%)
3年	第1回	8(23%)	15(43%)	9(26%)	3(9%)	35(100%)
	第2回	10(30%)	10(30%)	10(30%)	3(9%)	33(100%)

設問21.		4	3	2	1	計
全体	第1回	53(45%)	51(43%)	9(8%)	6(5%)	119(100%)
	第2回	50(43%)	49(43%)	9(8%)	7(6%)	115(100%)
1年	第1回	18(44%)	18(44%)	2(5%)	3(7%)	41(100%)
	第2回	19(43%)	20(45%)	3(7%)	2(5%)	44(100%)
2年	第1回	17(40%)	20(47%)	5(12%)	1(2%)	43(100%)
	第2回	16(42%)	16(42%)	4(11%)	2(5%)	38(100%)
3年	第1回	18(51%)	13(37%)	2(6%)	2(6%)	35(100%)
	第2回	15(45%)	13(39%)	2(6%)	3(9%)	33(100%)

設問22.		4	3	2	1	計
全体	第1回	45(38%)	44(37%)	16(14%)	13(11%)	118(100%)
	第2回	36(31%)	47(41%)	20(17%)	12(10%)	115(100%)
1年	第1回	13(32%)	18(44%)	6(15%)	4(10%)	41(100%)
	第2回	7(16%)	22(50%)	9(20%)	6(14%)	44(100%)
2年	第1回	16(38%)	17(40%)	6(14%)	3(7%)	42(100%)
	第2回	16(42%)	13(34%)	7(18%)	2(5%)	38(100%)
3年	第1回	16(46%)	9(26%)	4(11%)	6(17%)	35(100%)
	第2回	13(39%)	12(36%)	4(12%)	4(12%)	33(100%)

## 意識調査アンケート結果（保護者対象）

4：そう思う

3：どちらかというと思う

2：どちらかというと思わない

1：そう思わない

設問1.	4	3	2	1	計
第1回	29(30%)	46(48%)	12(13%)	9(9%)	96(100%)
第2回	9(32%)	15(54%)	3(11%)	1(4%)	28(100%)

設問2.	4	3	2	1	計
第1回	40(43%)	41(44%)	10(11%)	2(2%)	93(100%)
第2回	9(32%)	16(57%)	2(7%)	1(4%)	28(100%)

設問3.	4	3	2	1	計
第1回	23(24%)	52(54%)	14(15%)	7(7%)	96(100%)
第2回	6(21%)	15(54%)	5(18%)	2(7%)	28(100%)

設問4.	4	3	2	1	計
第1回	25(26%)	53(56%)	12(13%)	5(5%)	95(100%)
第2回	4(14%)	16(57%)	7(25%)	1(4%)	28(100%)

## 資料4

設問5.	4	3	2	1	計
第1回	45(49%)	39(42%)	5(5%)	3(3%)	92(100%)
第2回	8(29%)	13(46%)	7(25%)	0(0%)	28(100%)

設問6.	4	3	2	1	計
第1回	19(20%)	38(40%)	22(23%)	17(18%)	96(100%)
第2回	2(7%)	11(39%)	9(32%)	6(21%)	28(100%)

設問7.	4	3	2	1	計
第1回	36(38%)	41(43%)	12(13%)	7(7%)	96(100%)
第2回	9(32%)	15(54%)	2(7%)	2(7%)	28(100%)

設問8.	4	3	2	1	計
第1回	37(39%)	36(38%)	12(13%)	10(11%)	95(100%)
第2回	12(43%)	6(21%)	6(21%)	4(14%)	28(100%)

設問9.	4	3	2	1	計
第1回	24(25%)	38(40%)	24(25%)	10(10%)	96(100%)
第2回	4(15%)	8(30%)	11(41%)	4(15%)	27(100%)

設問10.	4	3	2	1	計
第1回	24(25%)	34(35%)	26(27%)	12(13%)	96(100%)
第2回	6(21%)	6(21%)	11(39%)	5(18%)	28(100%)

設問11.	4	3	2	1	計
第1回	18(19%)	48(50%)	24(25%)	6(6%)	96(100%)
第2回	4(14%)	14(50%)	7(25%)	3(11%)	28(100%)

設問12.	4	3	2	1	計
第1回	31(33%)	48(51%)	11(12%)	5(5%)	95(100%)
第2回	8(29%)	14(50%)	6(21%)	0(0%)	28(100%)

設問13.	4	3	2	1	計
第1回	39(41%)	46(48%)	7(7%)	3(3%)	95(100%)
第2回	7(25%)	16(57%)	4(14%)	1(4%)	28(100%)



令和元年度 文部科学省委託事業

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた  
指導の充実事業」

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

報告書（2年次）

令和2年3月発行

発行者 京都市立西京高等学校 定時制  
京都市中京区西ノ京東中合町1  
電話（075）841-1240

編集者 研究指定実行委員会

印刷・製本 株式会社 大気堂